

三協商事株式会社高松営業所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

はやしはいじ
拝師廃寺

2010年3月

三協商事株式会社

株式会社穴吹コミュニティ高松不動産センター

高松市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、三協商事株式会社高松営業所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、拝師庵寺の報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間、調査面積は、次のとおりである。

調査地　高松市上林町530番地3・4
調査期間　平成21年7月16日～7月31日
調査面積　190m²
- 3 発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当し、その費用は株式会社穴吹コミュニティ高松不動産センターが全額負担した。
- 4 現地調査は、高松市教育委員会教育部文化財課文化財専門員 高上拓が主に担当し、山元敏裕、大鷗和則、小川賢、渡邊誠、非常勤嘱託職員中西哲也、中村茂央が分担した。
- 5 整理作業は高上が担当した。
- 6 本報告書の執筆・編集は主に高上が担当し、第IV章集石造構2出土瓦の報告文と第V章第2節は渡邊が執筆した。
- 7 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第IV系にしたがった。
- 8 出土遺物の実測図は、土器やその他土製品等は1/4、遺構の縮尺については図面ごとに示している。土器実測図中で、土師質土器は断面白抜き、須恵質土器は断面黒塗りで表す。また、石器実測図中で現代の折損は濃く黒で塗り潰している。
- 9 写真測量を(株)四航コンサルタントに委託し、遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託した。
- 10 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	第Ⅲ章 調査の概要
第1節 調査の経緯 1	第1節 調査の方法 7
第2節 弔師庵寺における既往の調査 2	第2節 調査の概要と基本順序 8
第3節 試掘および工事立会の概要 2	第Ⅳ章 調査の成果
第4節 調査日誌 4	第1節 弥生時代 13
第5節 整理作業の体制と日程 4	第2節 古代 21
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	第3節 近世以降 33
第1節 地理的環境 5	第Ⅴ章 まとめ
第2節 歴史的環境 5	第1節 古代の区画溝について 38
	第2節 出土した瓦と寺院について 38

挿 図 目 次

Fig. 1 調査対象位置図 1	Fig. 18 弥生時代遺構出土遺物 21
Fig. 2 調査対象地各部の名称と 擁壁設置部分の工事立会成果 3	Fig. 19 SB1 平・断面図 22
Fig. 3 試掘調査・工事立会時出土遺物 4	Fig. 20 SD1・SD3 平面図・断面図 23
Fig. 4 高松市の地形と遺跡位置図 5	Fig. 21 SD1 出土遺物 23
Fig. 5 弔師庵寺と周辺の遺跡 6	Fig. 22 SD3 出土遺物 24
Fig. 6 第2遺構面中出土土器 8	Fig. 23 土坑・ピット平面断面図① 27
Fig. 7 調査区西壁断面図 9	Fig. 24 土坑・ピット平面断面図② 28
Fig. 8 調査区南壁断面図 10	Fig. 25 土坑・ピット平面断面図③ 29
Fig. 9 第1・第2遺構面遺構検出状況平面図 11	Fig. 26 土坑・ピット出土遺物① 30
Fig. 10 第3遺構面遺構検出状況 12	Fig. 27 土坑・ピット出土遺物② 31
Fig. 11 SH201 平・断面図 14	Fig. 28 SX1・SX2 平・断面図 32
Fig. 12 SH201 および開削遺構出土遺物 15	Fig. 29 SX1・SX2 出土遺物 32
Fig. 13 SH201 埋土上層出土遺物 16	Fig. 30 集石遺構 1・2 平面図と 集石遺構 1 出土遺物 34
Fig. 14 SH202 焼土および炭化材検出状況 16	Fig. 31 集石遺構 2 出土遺物① 35
Fig. 15 SH202 およびSP250 平・断面図 17	Fig. 32 集石遺構 2 出土遺物② 36
Fig. 16 SH202 および開削遺構出土遺物 18	Fig. 33 集石遺構 3 出土遺物 37
Fig. 17 弥生時代の遺構平・断面図 20	

挿 表 目 次

Tab. 1 整理作業工程表 4	Tab. 4 古代の遺物出土遺構一覧表 26
Tab. 2 基準点座標一覧表 7	Tab. 5 出土遺物観察表 39
Tab. 3 弥生時代の土坑・ピット一覧表 20	

図 版 目 次

PL. 1 1. 第1・第2遺構面遺構検出状況 (南から)	PL. 7 1. 調査区南壁西半断面
2. 第3遺構面遺構検出状況(南から)	2. 調査区西壁断面
PL. 2 1. 調査地区全景(南から)	3. SD 1・6 検出状況(東から)
2. 調査地区全景(北から)	4. SD 1 断面(東から)
3. SD 5・3 完壠状況(東から)	5. SD 3 検出状況(東から)
4. 集石遺構 1・2 完壠状況(東から)	6. SD 3 断面(東から)
5. SH201 完壠状況(北から)	7. SB 1 検出状況(東から)
6. SH202 完壠状況(北から)	8. SB 1 検出状況(西から)
PL. 3・4 出土遺物写真	PL. 8 1. SX 2 完壠状況(南から)
PL. 5 1. SH201 完壠状況(北から)	2. SP62 遺物検出状況
2. SH201 南壁断面(北から)	3. SP228 遺物検出状況
3. SH201 西壁断面(東から)	4. SP166 遺物検出状況
4. SX 7 検出状況(北から)	5. SK17 遺物検出状況
5. SH201 遺物出土状況(北から)	6. 集石遺構 1 検出状況
PL. 6 1. SH202 炭化木材検出状況(東から)	7. 集石遺構 1 遺物出土状況
2. SH202 完壠状況	8. 集石遺構 2 断面(西から)
3. SH202 西壁断面(東から)	
4. SH202 中央土坑断面	
5. SH202 遺物出土状況	

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本調査地は高松市上林町530番地3・4にあたり、三協商事株式会社によって高松営業所の建設が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「拝師廃寺」の範囲内であるため、平成21年5月25日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出が事業者より提出され、本市教育委員会から香川県教育委員会へ連達した。また、対象地は埋蔵文化財包蔵地内であるが、発掘調査等がなされていない地点であり、地下の埋蔵文化財の遺存状況が不明であったため、これを確認する必要がある旨を事業者に伝え、協議を行ったところ、平成21年7月3日付けで事業者より確認調査依頼が本市教委に提出された。本市教委では、この依頼を受けて7月9・10日に試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財の包蔵状況を確認したため、この内容も併せて県教委に報告した。

その結果、7月13日付けで県教委より2階建て建物部分及び浄化槽設置部分については「発掘調査」、平屋建て建物部分および擁壁設置部分、側溝設置部分については「工事立会」の行政指導があった(Fig. 2)。この指導を受けて事業者と再度協議したところ、発掘調査を行い、記録保存の保護措置を探ることで合意した。この合意の下、7月15日に本市と、事業者の了解を得て仲介業者である株式会社穴吹コミュニティ高松不動産センターは埋蔵文化財調査協定書を締結した。本市教委は協定に基づき、平成21年7月16日から31日にかけて、発掘調査を実施した。また、発掘調査終了後の8月5日と10月13日に前述の平屋建て建物部分および擁壁設置部分、側溝設置部分について立会調査を実施した。本書は発掘調査および工事立会の調査成果を報告するものである。



Fig. 1 調査対象位置図(縮尺=1/5000)

第2節 拝師廃寺における既往の調査

拜師廃寺は、古代において山田郡拜師郷に所在したとされる古代寺院である。かつて瓦が表採されたことから、本調査地付近が寺跡であると推定されている。また、戦前まで近隣に「ヒクチドー」と呼ばれる土壇が存在していたと伝えられ、「ひくち堂」と解することができることから、拜師廃寺に関する基壇ではないかと推測されている。ここでも平安時代中期と推定される軒丸瓦が表採されており、中には讃岐国分寺跡、府中山内瓦窯跡、長尾寺と同文の七葉複弁蓮華文軒丸瓦が含まれている。

以上のように地名考証と表採資料により寺院の存在が推定されていた地点であるが、今回の調査以前に発掘調査は行われておらず、遺跡の詳細な内容は不明であった。本調査で明らかになった点を以下に報告する。

(参考文献)

川畠聰 1999 「高松市内の古代寺院」『讃岐国弘福寺領の調査』Ⅱ 第2次弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書 高松市埋蔵文化財調査報告第37集 高松市教育委員会

第3節 試掘および工事立会の概要

第1節にて述べたとおり、平成21年7月9・10日に試掘調査を、8月5日と10月13日に工事立会を実施した。調査箇所はFig. 2のとおりである。

試掘調査では、2箇所の試掘トレンチを設定して調査を行った。その結果、合計3面の遺構面を検出した。各遺構面の詳細は第Ⅲ章第2節にて述べるため、ここでは省略する。また、試掘調査対象地の北側では、砂礫層の上がりが確認され、埋蔵文化財がほとんど確認できなかった。従って、調査対象地の北半で計画されている平屋建て建物部分については工事立会等の対応が妥当であり、南半の2階建て建物部分と浄化槽設置部分については発掘調査等の保護措置が必要である旨の意見を沿えて県教育委員会に報告した。出土遺物については、出土地不明であるが弥生土器鉢の口縁部（1）が出土したほか、第2遺構面中から須恵器杯片（2）が出土した。

工事立会の成果であるが、平屋建て建物部分と側溝設置部分では、掘削深度が現地表面から約40cmと浅く、遺構面まで至らなかった。擁壁設置部分では主に弥生時代と古代の遺構および遺物を検出した。試掘調査時の所見と同様に擁壁設置部分の南側では明黄褐色シルトを基盤層とするが、北に向かってシルト層が薄くなり、砂礫層を基盤層とするようになる。遺構は堅穴住跡の可能性が考えられるSX①のほか、土坑や溝、ピットなどを検出した。SK①からは白色系の弥生土器甕の口縁部（3）が、SP②からは底部に糸切り痕を明瞭に残す土器器皿が完形で出土しており（4）、発掘調査対象地の東側にも埋蔵文化財の包蔵範囲が広がることを確認した。なお、出土地不明遺物も併せてここで掲載している（5～10）。

以上から、今回の調査対象地ではほぼ全面にわたり埋蔵文化財が良好に遺存していることが判明した。

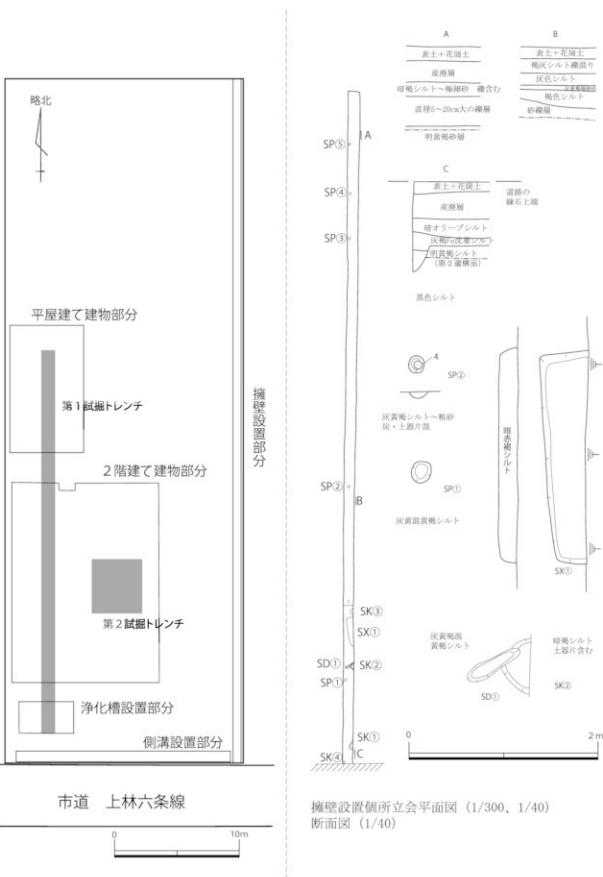


Fig. 2 調査対象地各部の名称と擁壁設置部分の工事立会成果

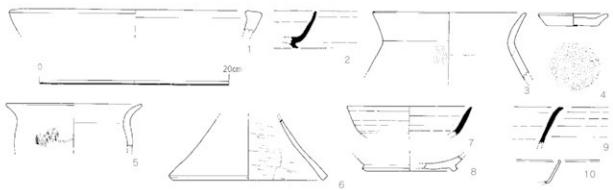


Fig. 3 試掘調査・工事立会時出土遺物（縮尺 = 1 / 4）

第4節 調査日誌

調査は平成 21 年 7 月 16 日より開始した。調査日程は以下のとおりである。

- | | |
|-------|-----------------------|
| 7月16日 | 重機掘削開始。基準杭設定、仮設トイレ設置。 |
| 7月17日 | 上面の遺構面検出完了。 |
| 7月18日 | 遺構検出、掘削開始。 |
| 7月23日 | 上面の遺構面完掘。写真測量用の撮影。 |
| 7月24日 | 下面の遺構面掘削開始。 |
| 7月29日 | 下面の遺構面完掘。写真測量用の撮影。 |
| 7月31日 | 埋め戻し完了。仮設トイレ、重機撤収。 |
| 8月10日 | 資料整理作業開始。 |

第5節 整理作業の体制と日程

整理作業は平成 21 年 8 月 10 日より開始し、平成 22 年 3 月に終了した。工程の詳細は以下のとおりである。

Tab. 1 整理作業工程表

	8	9	10	11	12	1	2	3
洗浄	■■■■							
接合・復元	■■■■	■■■■						
遺物実測	■■■■							
遺構図レイアウト		■■■■						
遺構図トレース		■■■■						
遺物レイアウト			■■■■					
遺物トレース			■■■■					
観察表作成				■■■■				
遺物写真撮影					■■■■			
写真レイアウト						■■■■		
原稿執筆						■■■■		
編集							■■■■	

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡の立地する高松平野は、平野を南北に貫く複数の河川の堆積作用により形成されたものである。平野には本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川などの河川が流れるが、中でも香東川の堆積作用が最も強く、春日川の西側付近まで香東川の堆積作用による平野が広がる。また、これらの河川はいずれも近世に大規模な変容を受けている。香東川は現在では石清尾山塊の西側を流れているが、古絵図などには本来山塊の東側にも流れていた事が記されている。また現在は理没しているが、平野中央部の林町から木太町にかけての範囲で複数の旧河道が存在したことが指摘されている。押師庵寺の周辺でも、長池や大池などを結ぶ旧河道の存在が推定されている。



Fig.4 高松市の地形と遺跡位置図

第2節 歴史的環境

旧石器時代～縄文時代 高松平野における旧石器時代の生活の痕跡は、久米池南遺跡、諏訪神社遺跡、雨山南遺跡、中間西井坪遺跡、香西南西打遺跡、西打遺跡などで確認されているが、本遺跡の位置する平野中央部付近ではいまだ検出例がない。

縄文時代 縄文時代の明瞭な遺構や遺物は極めて少ない。平野部での遺跡の増加が顕著に認められるのは晩期以降である。居石遺跡、松林遺跡、川岡遺跡、浴・長池遺跡、上天神遺跡、前田東・中村遺跡、林・坊城遺跡などで晩期の遺構・遺物が検出されている。

弥生時代 縄文時代晚期から弥生時代前期にかけて、平野部での集落の形成が顕著に認められる。本遺跡周辺でも、井手東II遺跡、上西原遺跡、東中筋遺跡など、縄文晚期から継続するこれらの遺跡では、小規模区画水田跡など農耕に関する遺構が検出されている。この後、浴・長池遺跡で前期から中期前葉まで連続した居住が認められるのを除けば、新たに生活の痕跡が認められるのは中期中葉以降である。松林遺跡、松並・中所遺跡などで居住の痕跡が認められる。後期後半には、空港跡遺跡、日暮・松林遺跡、一角遺跡、林宗高遺跡などで再度集落が形成され、一部はその後、終末期から古墳時代前期前半まで継続する。弥生時代の高松平野では集落の形成と解体が繰り返し認められ、長期間継続する集落が少ないという特徴が指摘されている。

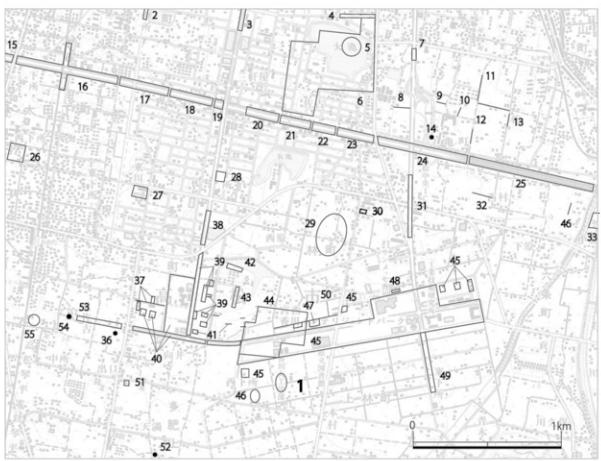
古墳時代 平野線辺部の丘陵上に数多くの古墳が築造される。高松平野中央部付近では、前期から中期までの累代的な墓域が形成される石清尾山古墳群が存在するほか、平野の東部では高松市茶白山古墳、南部では船岡山古墳などの有力な古墳が築造される。前期古墳の盛行とは対照的に、今岡古墳などを除いて中期古墳の例は極めて少ない。後期から終末期にかけては、丘陵上に数多くの群集墳が築造され、淨願寺山古墳群、南山浦古墳群などが調査されている。

古代 古代の高松平野は大きく西部の香川郡、東部の山田郡に分割され、平野部のほぼ全面に南北線が東西約 9 ~ 11km 個く条里地割が分布する。本遺跡周辺では特に弘福寺領譜岐国山田郡田団比定地における学際的な調査がなされ、当地の土地利用の変遷や条里地割について重

要な成果が得られている。この条里地割に沿う溝や建物跡が松縄下所遺跡、空港跡地遺跡、汲木遺跡などで検出されている。高松平野では古墳時代後期～古代の前半にかけて、それまで集落域の営まれていた微高地が埋没したとされ、それに伴い集落の断絶と形成が認められる。また、発掘調査で全容の知られる例は無いが、周辺では多肥廃寺などが古代寺院として知られる。中・近世 中世の武士としては香西氏・十河氏・由佐氏等が挙げられ、香西氏の平地の居館である佐料城、詰め城である勝賀城などが知られる。集落としては空港跡地遺跡で古代～中世の集落の変遷が詳細に検討され、当該期の高松平野を考える上で重要な知見が得られている。天正 16 (1588) 年、豊臣秀吉の臣家、生駒親正により高松城が築城され、城下町が整備される。その後、寛永 19 (1642) 年、松平頼重が東讃岐 12 万石を拝領し、高松城主として入封した。松平家は徳川將軍家の親藩として代々藩主をつとめ、明治維新を迎える。

(主要参考文献)

金田章裕 1993 「讃岐国における条里プランの振開」「古代日本の景観 方格プランの生態と認識」 吉岡弘文館
山本英之・中西克也編 1992 「讃岐弘福寺跡の調査」 弘福寺跡讃岐国山田郡田園調



1. 护師庵寺 2. キモンド一跡 3. 松縄下所遺跡 4. 上西原遺跡 5. 大池遺跡 6. 弘福寺領田園北地区比定地
7. 木人丸町区遺跡 8. 林若遺跡 9. 林下所遺跡 10. 林下所遺跡 11. 林下所・木大介今遺跡 12. 林下所遺跡
13. 林下所・六条遺跡 14. 林下所遺跡 15. 上天神遺跡 16. 大田下・御川遺跡 17. 肥前遺跡 18. 原石遺跡
19. 井手東一遺跡 20. 井手東一遺跡 21. 沿池遺跡 22. 沿池上遺跡 23. 谷松木遺跡 24. 林坊城遺跡
25. 六条上所遺跡 26. 太田城跡 27. 従化遺跡 28. 多肥下所遺跡 29. 天皇西原遺跡 30. お茶荒神 37. 松林遺跡
31. 宗高坊城遺跡 32. 六条西村遺跡 33. 六条城跡 34. 北原遺跡 35. 六条上川西遺跡 36. お茶荒神 37. 松林遺跡
38. 回原遺跡 39. 日暮・松林遺跡 40. 多肥松林遺跡 41. 多肥屋根遺跡 42. 池の内遺跡 II 43. 池の内遺跡 I
44. 弘福寺領田園南地区比定地 45. 空港跡地遺跡 46. 烟道跡 47. 一角遺跡 48. 公務員宿舎遺跡 49. 上林遺跡
50. 宮西・一角遺跡 51. 高木城跡 52. 天満宮古跡 53. 多肥平塚遺跡 54. 北原遺跡 55. 多肥廃寺 56. 空港跡地遺跡

Fig. 5 护師庵寺と周辺の遺跡 (縮尺 = 1/25000)

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査区は東西長約 12 m、南北長約 16 m を測る 2 階建て建物部分の南西端に東西長約 4 m、南北長約 4 m を測る浄化槽設置部分がとりつく形状を呈する。以下では 2 階建て建物部分と浄化槽設置部分の 2 つを併せて調査区と呼ぶ。

掘削方法 発掘調査に先立つ試掘調査によって合計 3 面の遺構面が存在することが事前に判明していた。調査期間に制限があり、また第 1 遺構面と第 2 遺構面の時期が近接し堆積層も薄く、遺構面ごとに 3 度に分けて掘削することが困難な状況であったため、1 度目の重機掘削で第 2 遺構面の上面まで掘削を行い、遺構精査と記録を行ったのち、第 3 遺構面の上面まで再度重機掘削を行うという工程を採用した。各遺構面の詳細は次節で述べるが、各遺構面に複数時期にまたがった土地利用の痕跡が残ることが判明した。従って遺構面によって遺構の所属時期を明確に比定することができない。理土の土質等からも比定は困難である。後の報告部分で遺構の検出状況を掘削次数ごとに提示しているが (Fig. 9・10)、あくまでも検出時の状況を示すものであり、同一図中の遺構の同時性を表現するものではない。なお、発掘調査完了後に調査区は掘削土で埋め戻しを完了している。

記録方法 調査区の周辺に 4 級基準点を設定し、記録を行った。世界測地系第 IV 系における各点の座標は Tab. 2 のとおりである。掘削は重機による遺構上面までの検出、人力による遺構の調査を基本とした。遺構断面図は縮尺 1/20 で作図し、遺構平面図は (株)四航コンサルタントに委託し、ポールシステムによる写真測量によって作成した。記録用の写真撮影は 35mm フィルムカメラを用いてモノクロネガフィルムとカラーリバーサルフィルムによる記録を行い、補助的にデジタルカメラを用いた。また、全景写真は四航コンサルタントに委託し、ポールシステムによってカラー写真の撮影を行った。これらの記録は全て高松市教育委員会にて保管している。

Tab. 2 基準点座標一覧表

	A 1	A 2	A 3
X	143269.880	143294.174	143297.309
Y	51913.323	51908.855	51925.904

(数値は世界測地系第 IV 系による)

遺構番号であるが、第 1・第 2 遺構面で検出した遺構はそれぞれ 1 から順に番号を振り分け、第 3 遺構面で検出した遺構は遺構番号の頭に「20」をつけ、SH201, SK201 などのように表記した。なお、遺構番号は遺構検出時に名付けているが、調査の結果遺構であると認められなかつたものについては、欠番としている。本来であれば、本書の作成時に再度遺構番号をふり直すべきであるが、調査範囲に対して遺構数が多く、重複しているため、調査時の記録と本書の記録に齟齬をきたすことの無いよう、原則として遺構番号は調査時のものをそのまま使用することとする。従って遺構番号の欠番も多々認められるが、御了承いただきたい。

第2節 調査の概要と基本層序 (Fig. 7)

掘削を開始すると、調査区全面で近代以降の廃棄物が表土下に多量に混入されている状況を確認した(Fig. 7-2層)。この層を除去し、掘削を行ったところ、合計3面の遺構面を検出した。以下、各遺構面の検出状況と土質について述べる。

第1遺構面 現地表面下約0.5 m程度で検出した褐色～灰褐色砂質シルトを中心とした層 (Fig. 7-27層)である。南壁断面図では調査区中央あたりでこの層が途切れたように見えるが、掘削時の所見から調査区のほぼ全域に広がっていたことを確認している。本層を基盤とする遺構は古代に属すると考えられる遺物が出土したほか、中世以降と考えられる遺構も本層を基盤層とし、黄灰色系シルトが埋土となることから、古代～中世にかけての遺構面であると考えられる。

第2遺構面 現地表面下約0.7 mで検出した遺構面で、黄褐色系砂質シルトを主体とする (Fig. 7-29層)。ピットや溝などの遺構を多数検出した。出土遺物をみると、弥生時代後期の遺構と古代の遺構が混在するため、弥生時代後期後半～古代の遺構面であると考えられる。第3遺構面の埋没後、あまり時間をおかず再び土地利用がなされ、その後一度廃棄され、古代に再び土地利用がなされたようである。なお、第2遺構面中から弥生土器の高杯 (11)、壺底部 (12)などが出土している。



Fig. 6 第2遺構面中出土土器 (縮尺 = 1/4)

第3遺構面 調査区の南半を中心に現地表面下約1 mの深度で検出した。円窓を多量に含む褐色～灰褐色砂質シルト (Fig. 7-56層)から構成される。本層を基盤とする遺構は調査区南側に限定されて、出土遺物から弥生時代後期後半の時期が考えられる。

砂礫層と原地形 試掘調査時に平屋建て建物部を中心とした、調査対象地の北側では前述の第1・2遺構面に相当するシルト層が検出されず。現地表面下0.6mの標高から下は砂礫層が堆積していた。調査区で検出した第3遺構面はこの砂礫層と一連の堆積層であり、北から南に向かって緩やかに標高が下がる地形であることが確認できた。本層は旧河道埋没時の砂礫層であると考えられ。原地形は調査区北側で埋没旧河道が自然堤防を形成し、微高地状に高く、南に向かって傾斜する地形を形成していたことがわかる。

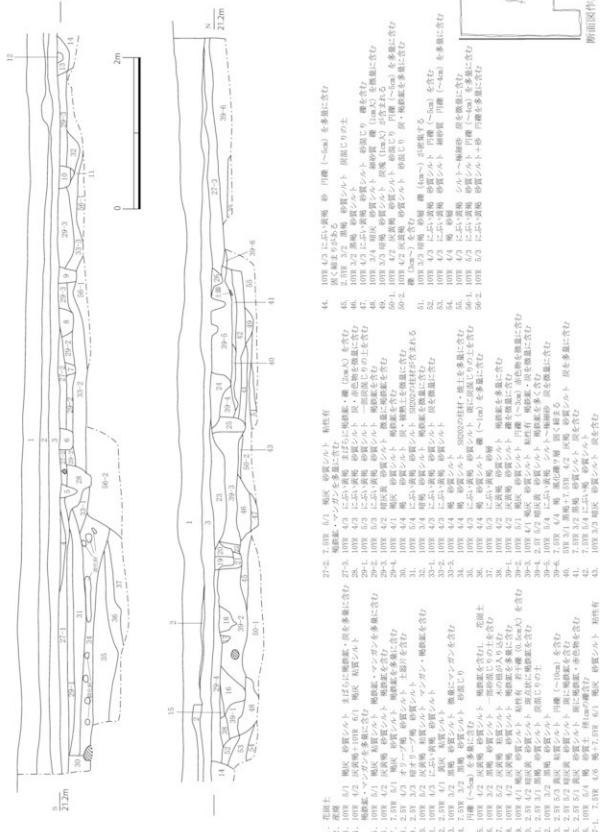
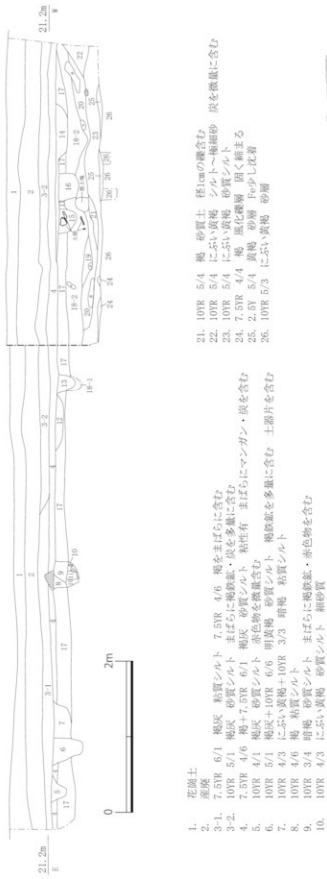
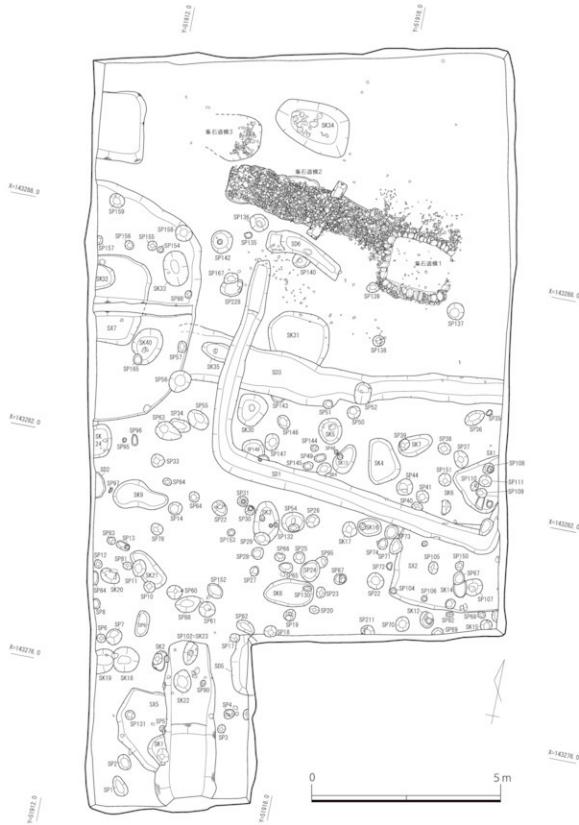


Fig. 7 調査区西壁断面図 (縮尺 = 1/50)

B



断面図作成箇所



第IV章 調査の成果

第1節 弥生時代

弥生時代に属する構造としては竪穴住居跡や土坑、ピットを検出した。検出した構造は、第三章第1節で述べたとおり、基盤層や埋土によって時期を特定することが困難であったため、出土遺物から時期を決定している。

(1) 竪穴住居跡

SH201 椰子区中央西隅で検出した竪穴住居跡である。第1・2遺構面精査時に、その輪郭を検出していたため、Fig. 9にも一部掲載されているが、完掘状況はFig.11のとおりである。平面形は隅丸方形ないし方形を呈するものと考えられるが、西側が調査区外に延びるため正確な形状は不明である。検出状況での最大長が南北約6.2mを測る。後述する古代の溝SD 3との切りあい関係は、試掘時の掘削と近代の搅乱によって不明であるが、出土遺物の時期差からSD 3によってSH201が切られているものと考えられる。

床面は東西畦断面図の6層が該当する。炭化物を含み固く締まったにぶい黄砂質シルトである。東西畦に沿って床面の断割り調査を実施したが、複数面の床面は検出できず、砂礫層（8層）を基盤とし、その上面に床面を成形したものと考えられる。

床面検出時に西側を中心として土坑状の浅い落ち込みが認められた。平面形は概ね方形を指向するものの不定形である。遺構の位置関係から、跡跡である可能性が考えられるため精査を行ったが、炭や焼土といった被然の痕跡は認められなかった。ただしこの範囲では褐鉄鉱と考えられる鉄分の沈着が著しく、出土した土器等にも鉄分の付着したものが多く認められた。サンプルを採取し、磁石による吸着を試みたが、付着するものは無かった。鉄分の沈着を検出した範囲では、既に砂礫層からなる地山層直上まで掘削を進めていたため、地下水位の変動などによって地山である砂礫層に鉄分が沈着したものと考えられる。

その他柱穴をいくつか検出したが、もとより全体の1/2以下の検出状況であるため、本来の柱配置を復元することは困難である。ただし、推定される住居跡中央との位置関係から、SK33とSK40をそれぞれ住居跡中央を中心に反転し復元すると、住居中央に4本の柱が開く配置が推測できる。

出土遺物としては弥生土器と石器が認められた。13は広口壺の口縁部である。口縁部外面に竹管文がめぐる。14・15は底部である。底部と体部の屈曲は強く、内面には強いヘラケズリが認められる。16は小型の鉢である。17・18は高杯であり、19は大型の鉢である。S 1・S 2は台石の可能性の考えられる砂岩製の石製品である。S 1は中央に弱い凹面が形成されている。そのほか、SH201中央のSK 7からも、広口壺（20）、大型鉢（21）、片口鉢（22・23）が出土している。SK32からは大型の鉢（24～27）が出土している。口縁部はほぼ直立してのび、26では強く屈曲して体部下半に続く。体部下半の外側にはヘラケズリが施される。27をみると、内外面ともにハケ調整のちのヘラミガキが認められる。接合関係は確認しなかつたが、焼成や胎土から、21～23の鉢と同一個体である可能性が考えられる。

SK33からは広口壺（29）と壺（28）が出土した。壺の口縁部は「く」の字状に強く屈曲し、端部は肥厚せずそのまま取める。

出土遺物からも、SH201とSK32・33に大きな時期差は認められない。断片的な資料であるが、広口壺・壺の口縁部が肥厚しない点、平底の底部が認められる点や鉢・高杯の形状から、おおよそ後期後半に比定できる。

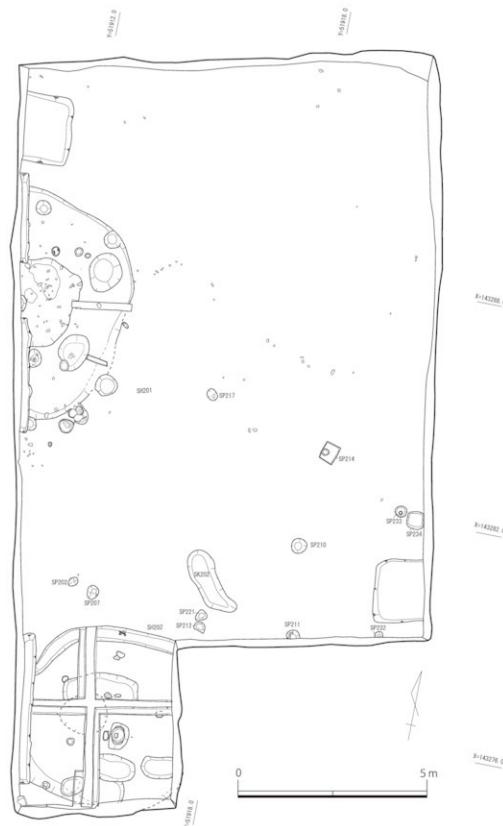


Fig.10 第3遺構面遺構検出状況（縮尺 = 1/100）

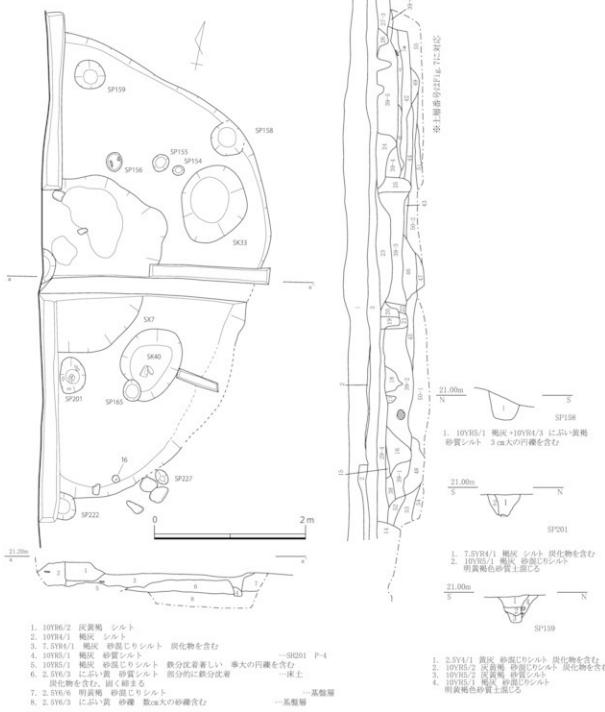


Fig.11 SH201 平・断面図 (縮尺 = 1/50)

なお、遺構理土の上層には弥生土器（30～39）とともに土師器（40）須恵器片（41～43）も含まれていた。堅穴住居跡の床面からは遊離した資料であり、堅穴住居が発掘されたのちに形成された墳地に古代以降埋入した遺物であると考えられるが、ここで報告を行う。30～39は弥生土器である。30は広口壺で、34、36、38、39は大型の鉢縁部であると考えられる。

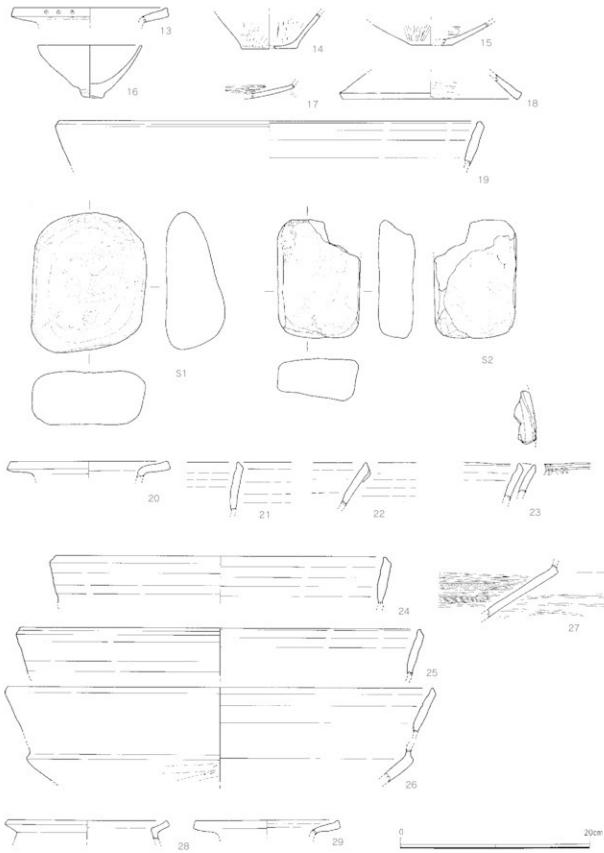


Fig.12 SH201 および関連遺構出土遺物（縮尺 = 1 / 4）

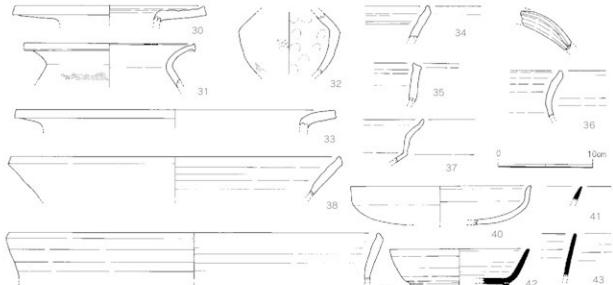


Fig.13 SH201 墓土上層出土遺物 (縮尺 = 1 / 4)

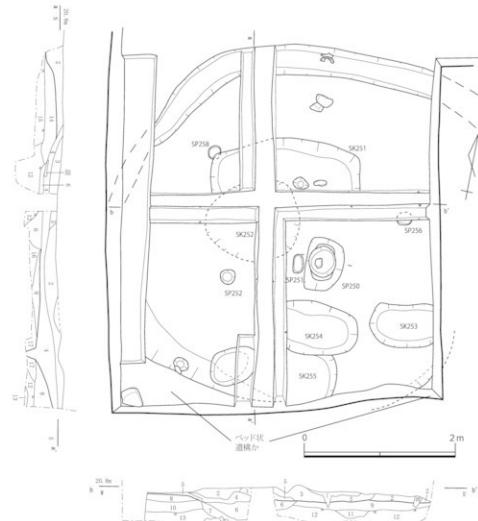
36は口縁部が渦曲しており、片口鉢の片口部であると考えられる。37は強く外反する高杯である。40は土器師壺である。器形から畿内土産土器の可能性も考えられたが、胎土に白色粒を少量含み、内面に暗文が施されないことからその可能性は低い。41～43は須恵器杯である。43は削り出しによる輪高台をもつ高台付杯で、口径14.7cmを測る。

SH202 調査区南西端で検出した堅穴住居跡である。第Ⅲ章第2節で述べたとおり、調査区の原地形は南側に向かって下降する傾斜を示し、SH202周辺が調査範囲内で最も標高の低い場所に当たる。このため、厚い堆積層が本構造を被覆していた。

被覆する土層を除去すると、炭化材が多量に残存する状況を確認した(Fig.14)。堆積状況ではFig.15-2～5層に該当する層である。炭化材の検出状況での木目方向を観察すると、断面観察用畦の交点や南東よりの地点付近を中心として、放射状に分布することが判明したため、上屋の構築材が焼失して堆積した状況である可能性が高い。また、調査時の所見として、炭化材の中には板状の薄いものが多く含まれていた。さらに本層には、炭化材のみならず、焼土も多量に含まれていた。



Fig.14 SH202 焼土および炭化材検出状況 (縮尺 = 1 / 50)



古代の遺構堆土

1. 1098/2 黃褐色 砂質シルト
2. 1098/2 にぶい黄褐色 砂質シルト 地土+地土をまばらに含む
3. 1098/6 黄褐色 砂質シルト 地+地土を多量に含む
4. 1098/6 黄褐色 砂質シルト 地+地土を多量に含む
5. 2層+1098/2 黄褐色 砂質シルト

遺構堆土

6. 1098/1 黄褐色 砂質シルト
7. 1098/1 にぶい黄褐色 砂質シルト
8. 1098/1 にぶい黄褐色 砂質シルト
9. 1098/1 黄褐色 砂質シルト
10. 1098/1 黄褐色 砂質シルト 地面 (-5cm) を微量に含む
11. 1098/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (10cm/1mRC) 固結じり しまり無し
12. 1098/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (10cm/1mRC) 固結じり 地上
13. 1098/4 黄褐色 砂質シルト 地山
14. 1098/4 黄褐色 砂質シルト 地面 (-5cm) を微量に含む
15. 1098/4 黄褐色 砂質シルト 織成じり

床面か

16. 1098/2 にぶい黄褐色 砂質シルト 地面 (-5cm) を微量に含む
17. 1098/2 にぶい黄褐色 砂質シルト 地面 (-5cm) を微量に含む
18. 1098/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 地面 (-5cm) を微量に含む
19. 1098/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 地面 (-5cm) を微量に含む
20. 1098/4 黄褐色 砂質シルト 地面 (-5cm) を微量に含む



Fig.15 SH202 およびSP250 平・断面図 (縮尺 = 1 / 50)

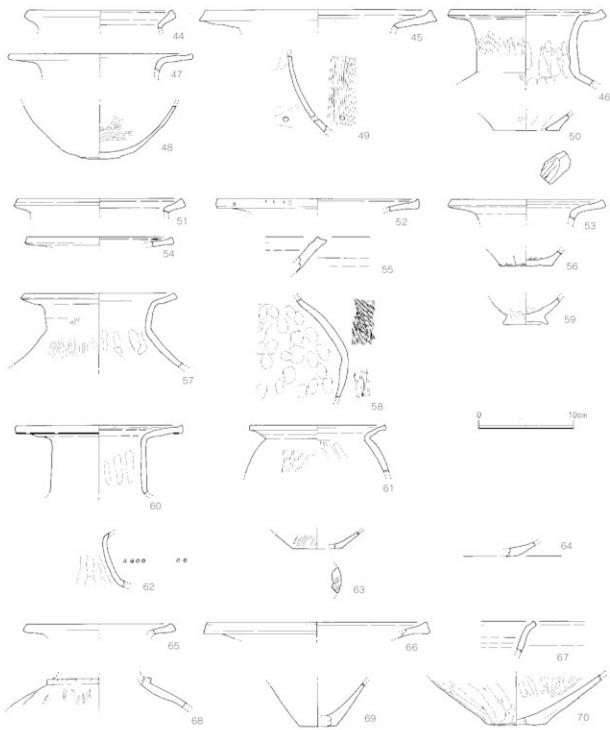


Fig.16 SH202 および周辺遺構出土遺物（縮尺 = 1 / 4）

なお、炭化材の樹種等は鑑定を行っていないため不明である。

炭化材の検出状況を記録したのち、遺構の平面形および柱跡などを確認するため、Fig.15-2～5層を除去した。その結果、住居跡の北辺を検出したが、その他各辺は調査区外へ続いている。平面形並びに規模は不明である。床面であるが、掘削時には貼り床状の締まった土層を確認することができなかった。上部構造の崩落後に堆積した可能性が高い2～5層の存在と、断割り部下層で検出した地山である砂礫層との関係から、9・10・16・17層が床面に相当す

るものと推測される。この床面上からは、複数の遺構状の落ち込みを確認しているが、居住跡全体の平面形が不明で遺構の中心部の位置も不明であるため、本來の柱配置などは不明である。SK251・253～255などは不定形で掘り込みも浅いため、原地形の起伏に起因する堆積層の変わり目を捉えたものである可能性が高い。ただし、SK250は住居跡にともなう遺構の可能性が高いと考えられる。

調査区南東隅と南西隅では壇状の高まりを一部で検出しており（Fig.15-8・14層など）、ベッド状遺構の可能性が考えられる。また、検出した遺構の北辺では塗溝を検出した。

出土遺物であるが、44～50は、SH202中で出土し、船橋層位の不明な資料である。51～56は、炭化材検出層中で検出した遺物である。そのほかにもSK253からは弥生土器窯（61）が出土した。また、SK254からは平底の弥生土器底部片のほか不明細片が出土した。SK255からは竹管形の巡る弥生土器広口壺の頸部片（62）のほか、平底の底部片（63・64）が出土している。SX 5からは弥生土器広口壺（65・66）、鉢（67）が出土しているほか、頸部と体部の境に刻目を持つ突帯を巡らせた壺の体部片（68）、平底の底部片（69・70）が出土している。柱痕の可能性が考えられるSP250からは広口壺の口縁部片（57）と壺の体部片（58）、小型鉢の底部片（59）が出土した。

SH202と住居跡内の他の遺構から出土した遺物には大きな時期差は認められない。炭化材を含む層で被覆されていたこと、床面が複数は認められなかった点からも、混入等の可能性は少ないものと考えられる。広口壺・壺・高杯の口縁部が肥厚しない点、平底の底部に加えて一部丸底に近い底部（48）が認められる点などから、おむね弥生時代後期後半の時期が推定できる。

（2）土坑・ピット

第Ⅲ章第1節にて記述したとおり、遺構面によって遺構の時期が明確に分離できない状況であるため、出土遺物からその時期比定を行う。弥生時代に属すると考えられる土坑・ピットはTab. 3の通りである。また、そのうち規格や出土遺物等から特徴的なものについて記述を行う。**SK17**（Fig.17） 調査区南東で後述するSD 1 の南側で検出した土坑である。第2遺構面を基盤層とし、にいわゆる白色系の土器であり、粘土接合痕を明瞭に残す。

SK31（Fig.17） 調査区中央で後述するSD 3 の北側に位置し、SD 3 によって切られた土坑である。弥生土器の広口壺（75）、平底の底部（76）、高杯の脚部（77）が出土している。

SD 5（Fig.17） 調査区南で検出した遺構である。検出時は直線的に伸びる平面形が推測されたため溝として遺構番号を振り分けたが、掘削の結果土坑の可能性が高いことが判明した。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物では弥生土器高杯の口縁部（78・79）が出土したが、SH202の埋没後に掘削された遺構であり、掘り返しによる混入の可能性が考えられる。埋土の特徴からは古代の遺構との共通性が高い。

SP 3（Fig.17） 調査区南西隅で、SH202が埋没した後に掘削されたピットである。外面にタタキ痕を残す平底の弥生土器底部片（81）が出土している。

Tab.3 弥生時代の遺物出土遺構一覧表

遺構名	(規模) 最大幅×深さ (m)	出土遺物	遺構名	(規模) 最大幅×深さ (m)	出土遺物
SP2	0.4m×0.07m	弥生土器甕口縁部、土師質土器片	SK1	0.8m×0.3m	弥生土器壺・甕体部片
SP3	0.2m×0.05m	弥生土器底部	SK17	0.4m×0.2m	土師質土器片
SP135	0.2m×0.05m	弥生土器甕口縁部	SK31	1.7m×0.1m	弥生土器底広口壺、高杯
SP165	0.3m×0.07m	弥生土器甕口縁部、土師質土器片	SK32	0.7m×0.04m	弥生土器大型鉢片
SP250	0.6m×0.4m	弥生土器甕口縁部、土師質土器片	SK33	0.9m×0.4m	弥生土器甕・鉢口縁部片、土器細片
SD 5	0.6m×0.4m	弥生土器甕体部片、高杯	SK255	0.7m×0.2m	弥生土器底部片、土師質土器細片
SX5	2.3m×0.06m	弥生土器甕肩部片、甕・甕体部片	SK7	2.5m×0.2m	弥生土器大型鉢片、土師質土器片

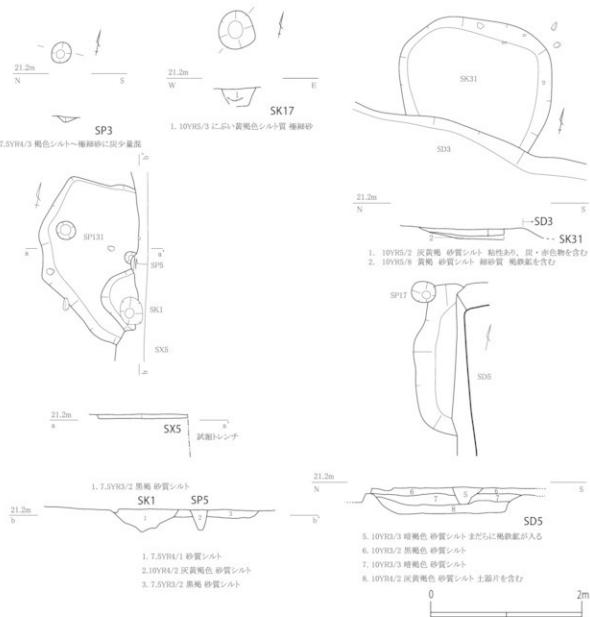


Fig.17 弥生時代の遺構平・断面図 (縮尺 = 1/40)

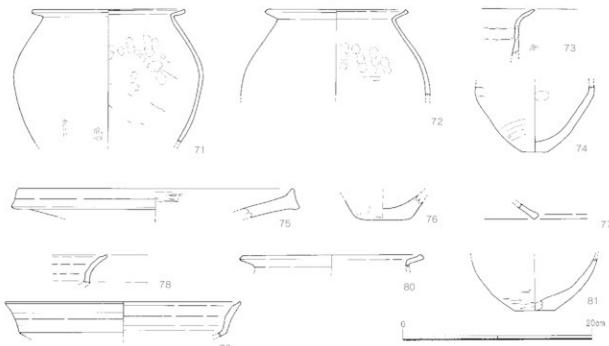


Fig.18 弥生時代遺構出土遺物 (縮尺 = 1 / 4)

SP165 調査区中央西側でSK40を切って形成されたピットである。遺物には弥生土器甕の口縁部(80)が認められる。口縁部は肥厚せず単純に収める個体で、SH201出土遺物と同時期の資料であると考えられる。

第2節 古代

古代に属する遺構は、主に第1・2遺構面を基盤層として検出した。

(1) 掘立柱建物跡

SB 1 調査区南側で検出した掘立柱建物跡である。第1・2遺構面掘削時には、周辺に多数のピットが存在しており、その形態を認識することができなかつたが、第3遺構面掘削時に遺構深度の浅い周辺の遺構が削平された段階で認識することができた。

北西から時計回りにSP22・SP54・SP210・SP211・SP18・SP61から構成される。桁行は南北1間、東西2間である。柱の中心間の距離は最短で18 m、最長で26 mを測り、平均すると約22 mである。SP211埋土中に被熟土、SP210に炭が混じるほかは、灰黃褐色シルト層が遺構埋土となる。

SP54からは黒褐色土器碗が出土した(82)。内面にのみ炭素の吸着が見られる(PL 3)。やや器壁が摩滅しており、内面のミガキの有無は不明である。底部は貼付け高台であり、断面三角形を呈する。

(2) 溝

SD 1 調査区中央で検出した溝で、「四」字状に方形を指向して掘削されている。南北方向に延びる部分は座標方位にはほぼ一致し、東西の部分はそれに直交する。後述するSD 3を切って形成され、東端は調査区外に延びる。最大幅は0.7 m、深度は0.2 mを測り、埋土は灰褐色砂質シルトである。SD 6との位置関係から、SD 1とSD 6が一連の溝であった可能性も考えられる。この推定が正しければ、東西約8.0 m、南北5.8 mを測る方形の区画が存在したことが推測される。

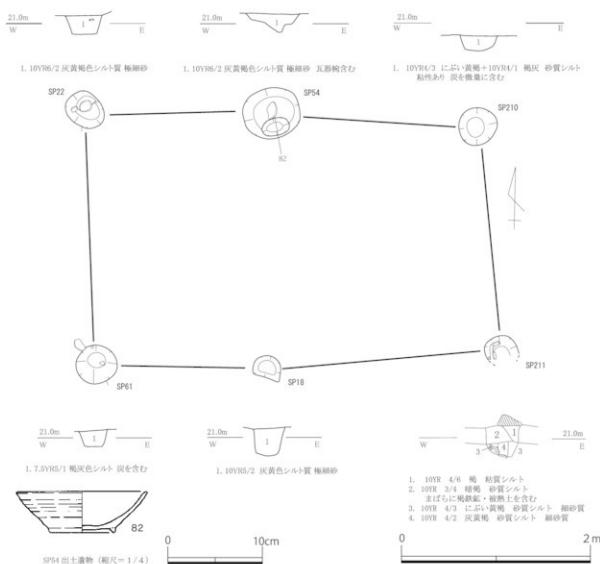


Fig.19 SB 1 平・断面図 (縮尺 = 1/40)

この方形区画内には土坑やピットが複数存在するが、建物跡等を復元することはできなかった。

出土遺物には弥生土器(83～85)、土師器(86～87)、須恵器(88～95)、台石(S3)が出土壤している。83はいわゆる白色系土器の壺である。内外面ともにハケ調整が顕著である。86は土師器高杯の杯部である。87は器種不明体部であるが、内面に輪状に黒色化した部分が認められる。重ね焼き等の痕跡であろうか。89～92は杯である。89・92は無高台であり、89は底部の屈曲が強く、92は屈曲が緩やかで丸みを帯びる。90は輪高台を持つ高台付杯であり、口径は16.0cmを測る。94・95は須恵器壺である。細片であり、図化し得なかったが黒色土器片も出土している。黒色土器細片から、やや時期が下る可能性も残るが、細片であり混入の可能性が高いものと考えられる。出土遺物から遭構の埋没年代がおおむね8世紀前半にあたるものとの考えられる。

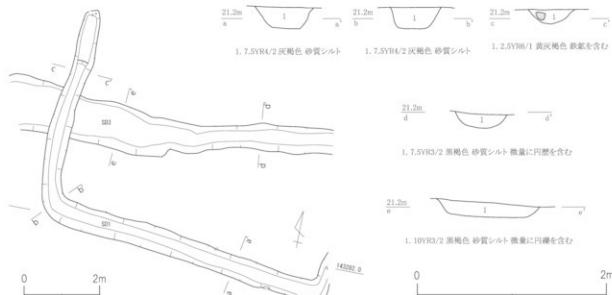


Fig.20 SD 1・SD 3 平面図 (縮尺 = 1/100) 断面図 (縮尺 = 1/40)

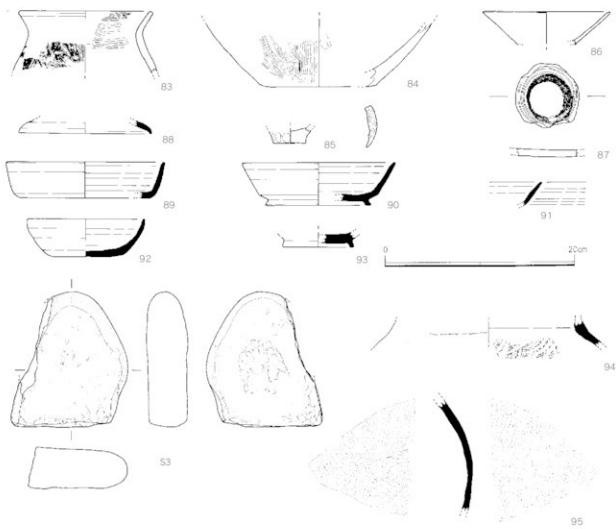


Fig.21 SD 1 出土遺物 (縮尺 = 1/4)

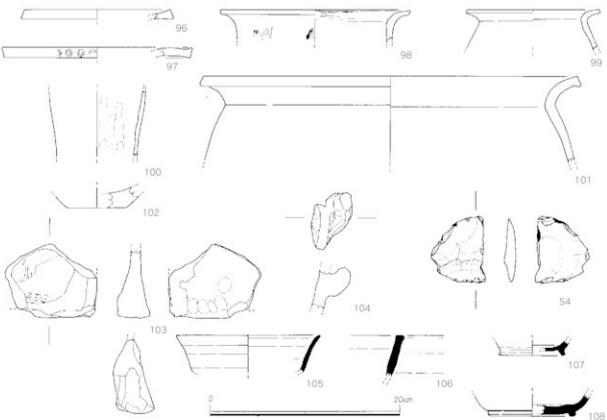


Fig22 SD 3出土遺物（縮尺 = 土器1/4, 石器1/2）

SD 3 調査区中央で東西方向に検出した溝である。第2造構面を基盤層として形成される。切りあい関係では、SD 1 に切られ、SH201を切る。東から西側へ向かって幅が広くなり、最大幅は12 m、深さ0.15 mを測る。埋土は円窓を含む黒褐色砂質シルトである。出土遺物では弥生土器(96～102)、土師器(103・104)、須恵器(105～108)、石器(S 4)が認められる。96・97は広口壺の口縁部である。97は口縁部外面に竹管文が巡る。98・99・101は蓋である。100は直口壺の頸部である。102は平底の底部である。103は土師器の移動式竈片である。104は把手付鉢である。105は口縁部がやや外反する杯である。106は壺鉢口縁部である。107・108は高台を有する底部である。S 4は器種不明のサスカイト片である。小片が多く時期決定が困難であるが、概ね7世紀末～8世紀の埋没年代が想定される。

(3) 土坑・ピット

多数のピットおよび土坑を検出したが、古代に比定できる遺物の出土したものをTab. 4にまとめた。なお、土師質の土器細片のみ出土した造構については、時期比定ができないが、あわせてTab. 4に掲載する。中でも実測可能な資料が出土した造構を中心に記述を行う。

SK 1 調査区南西でSX 5を切って形成された土坑である。試掘トレンチによって東側は削平されており、本来の形状は不明である。褐灰砂質シルトが堆積しており、埋土中から弥生土器(109～111)、須恵器(112)が検出した。109-110は平底の底部で体部と底部の屈曲が強く、109では内面にハレケズリの痕跡が認められる。111は高杯の脚端部である。112は輪高台付の椀・杯底部である。112から造構の堆積時期が古代であると考えられる。

SK 2 調査区南西で検出した二段掘り方の柱坑である。第一造構面を基盤層とし形成される。土師器壺(113)と土師器皿(114)が出土している。

SK 3 調査区中央南よりでSD 1の南から検出した土坑である。SP29に切られる。須恵器壺の口縁部(115)を検出した。体部内面には青海波文が認められ、口縁部はやや外反気味に直し端部は丸く収める。

SK 5 調査区中央でSD 1とSD 3の間によう検出した土坑である。117は須恵器の椀・杯底部である。屈曲が弱く、扁平で低い輪高台をもつ。

SK 9 調査区中央西側で検出した土坑である。平面梢円形を呈し、最大長は1.1 mを測る。埋土中より須恵器(118～121)を検出した。118は蓋の端部である。119・120は杯で119は口径12.0cmを測る。121は高台の高い輪高台で、高台の端部は弱く外方に広がる。

SK10 調査区中央西側でSH201を切って形成された土坑である。SH201の掘削時に削平し、平面形などは不明である。壺の口縁部(122)、高杯脚部(123)とともに、細片であり図化していないが瓦片が出土したため、古代以降の造構であると考えられる。

SK14 調査区南東隅でSX 2の中央付近に位置し、SP67に切られる。土師器壺の口縁部(124)、土師器杯底部(125)が出土している。

SK30 調査区中央や西より、SD 1とSD 3の間で検出した土坑である。出土遺物では弥生土器(126・127)、須恵器(128～130)が出土した。126は広口壺、127は鉢である。127は口縁部が直線的に伸び、径の復元が不能な破片であるため、片口鉢の可能性も考えられる。128・129は蓋である。129は扁平なつまみ部であり、中央がやや凹む。130は杯・皿の口縁部である。傾きから皿である可能性が高いものと考えられる。

SD 2 調査区中央西側で検出した造構であり、西側は調査区外へ続く。調査時は直線的に伸びるものと考えられたため、SD 2で造構番号を付けたが、掘削の結果土坑の可能性が高いことが判明した。須恵器(131)、土師器(132・133)が出土している。131は蓋である。口縁部は弱く屈曲し、下方に伸びる。132は土鍋である。突帯を貼付けた後に上下両側からハケ調整がなされる。133は移動式竈片である。

SP14 調査区中央西側でSK 9の東側に検出したピットである。黒色土器椀(134)、土師器杯(135)、須恵器底部(136)が出土している。134は内面にのみ炭素の吸着がみられる。貼付けの輪高台をもち、断面三角である。調整技法では内面にミガキの痕跡を残す。

SP62 調査区南東隅で検出したピットである。須恵器壺の頸部以下がほぼ完形に近い形で残存していた(140)。140は底部を下に直立した状況で検出しており、意図的な埋納行為によるものである可能性が考えられる(PL 8-2)。口縁部付近は後世の擾乱で欠損した状況であろう。SB 1の南側に近接した位置にあり、掘立柱建物の周辺に地鎮等の目的で埋納された造構である可能性も考えられる。140は体部最大径が中心よりやや上よりにあり、底部は削り出しにより輪高台となる。高台の内側にはほぼ等間隔に爪の圧痕が残る。

SP67 調査区南東隅でSX 2の中央付近に位置し、SK14を切る。図化していないが須恵器壺の体部片のほか、須恵器高杯の接合部(137)が出土している。

SP71 調査区南東隅でSX 2を切りこんで形成されたピットである。須恵器杯の底部(138)が出土している。

SP106・107 調査区南東隅でSX 2中に位置するピットである。SP106からは須恵器杯の口縁部片(139)が出土した。口径は約14.4cmを測る。SP107からは須恵器杯底部(141)が出土している。

Tab. 4 古代の遺物出土遺構一覧表

遺構名	(規模) 最大径×深さ (m)	出土遺物	遺構名	(規模) 最大径×深さ (m)	出土遺物
SK2	0.5m×0.3m	土師質土器細片	SP55	0.6m×0.4m	弥生土器口縁部片、須恵器甕体部片、土器細片
SK3	1.1m×0.2m	土師質土器細片	SP56	0.6m×0.2m	須恵器片、土師質土器細片
SK4	1.2m×0.08m	弥生土器口縁部、平底弥生土器底部片、須恵器不明体部片	SP60	0.4m×0.3m	須恵器片、土師質土器細片
SK5	0.7m×0.2m	土師質土器細片	SP61	0.5m×0.09m	土師質土器細片
SK7	0.9m×0.2m	土師質土器細片、須恵器片	SP62	0.7m×0.2m	須恵器甕体部、土師質土器細片
SK8	1.3m×0.06m	須恵器片、土師質土器片	SP63	0.8m×0.2m	須恵器甕体部片、土師質土器細片
SK9	1.5m×0.1m	須恵器甕体部片、土師燒肩部	SP67	0.4m×0.2m	土師質土器片
SK12	0.5m×0.2m	土師質土器細片	SP71	0.2m×0.04m	土師質土器細片
SK13	0.8m×0.2m	須恵器甕体部片、土師質土器片	SP72	0.3m×0.2m	土師質土器細片
SK16	0.7m×0.2m	土師質土器細片	SP78	0.5m×0.2m	須恵器片、土師質土器細片
SK22	0.6m×0.3m	燒土塊、土師質土器細片	SP84	0.4m×0.03m	土師質土器細片
SK30	0.9m×0.2m	土師質土器細片	SP107	0.3m×0.3m	土師質環、須恵器甕环底部片、土師質土器細片
SP1	0.6m×0.1m	土師質土器細片	SP109	0.3m×0.2m	須恵器甕体部片、梯子状タタキ施土師燒肩部片
SP4	0.3m×0.1m	土師質土器細片	SP111	0.2m×0.09m	土師質土器細片
SP5	0.2m×0.3m	須恵器不明体部片	SP130	0.2m×0.09m	土師質土器細片
SP6	0.3m×0.06m	土師質土器片	SP131	0.3m×0.1m	須恵器口縁部片、土師質環底部片、土師質土器細片
SP7	0.4m×0.1m	須恵器甕体部片	SP138	0.4m×0.2m	土師質土器細片
SP8	0.3m×0.3m	黒色土器底部片、須恵器底底部片	SP139	0.4m×0.2m	土師器口縁部片
SP9	0.7m×0.07m	土師器口縁部片	SP140	0.2m×0.06m	土師器口縁部片
SP10	0.2m×0.3m	土師質土器細片	SP144	0.3m×0.06m	土師質土器細片
SP12	0.4m×0.08m	土師質土器細片	SP145	0.5m×0.4m	土師質土器細片
SP13	0.4m×0.3m	黒色土器底部片	SP147	0.6m×0.1m	須恵器甕口縁部、土師質土器細片
SP14	0.3m×0.2m	角内石粒を含む土師質土器細片	SP148	0.3m×0.3m	土師質燒肩部、土師質高台付环底部片、須恵器甕体部片
SP17	0.4m×0.2m	黒色土器底部片、須恵器片	SP151	0.5m×0.1m	土師質土器細片
SP18	0.3m×0.2m	土師質土器細片	SP152	0.3m×0.2m	土師質土器細片
SP25	0.3m×0.05m	黒色土器底部片、土師質土器細片	SP155	0.4m×0.2m	土師質土器細片
SP27	0.3m×0.07m	須恵器片、土師器口縁部片	SP210	0.5m×0.2m	黒色土器口縁部片、土師器口縁部片
SP28	0.4m×0.2m	須恵器、土師質土器細片	SP22	0.6m×0.1m	土師質土器細片
SP33	0.2m×0.2m	土師質土器細片	SP221	1.0m×0.1m	土師質土器細片
SP35	0.5m×0.2m	土師燒肩部片	SP222	0.7m×0.2m	土師器口縁部片、細片
SP37	0.6m×0.2m	土師質土器細片	SP228	0.5m×0.1m	底部未切須恵器底部片、土師質器口縫片
SP40	0.5m×0.3m	須恵器、須恵器底部片	SP234	0.3m×0.07m	土師質土器細片
SP44	0.6m×0.2m	土師器口縁部片、須恵器片	SX1	1.4m×0.4m	土師質土器細片
SP54	0.6m×0.2m	須恵器底部片	SX2	3.3m×0.1m	弥生土器片、土師器片、須恵器甕・壺片、~切底部片+土器片

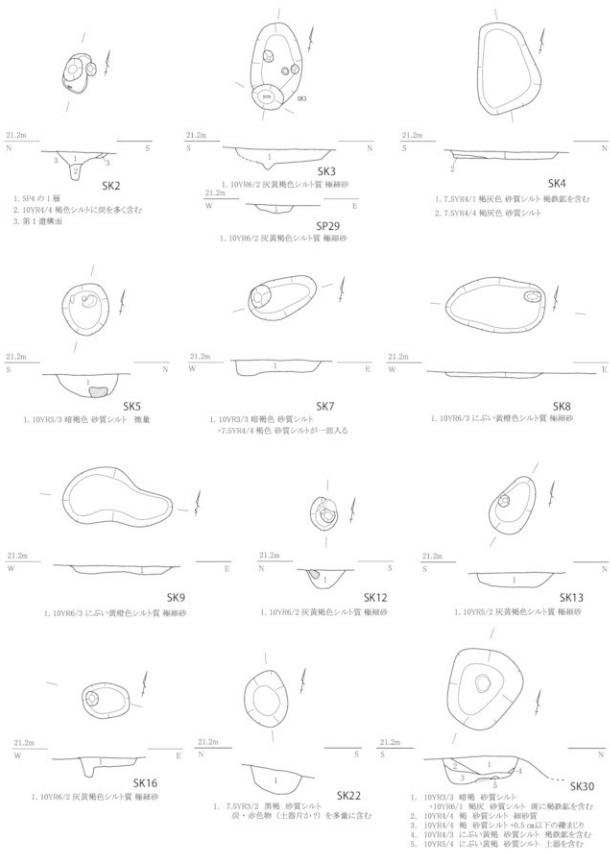


Fig.23 土坑・ピット平面図① (縮尺 = 1/40)

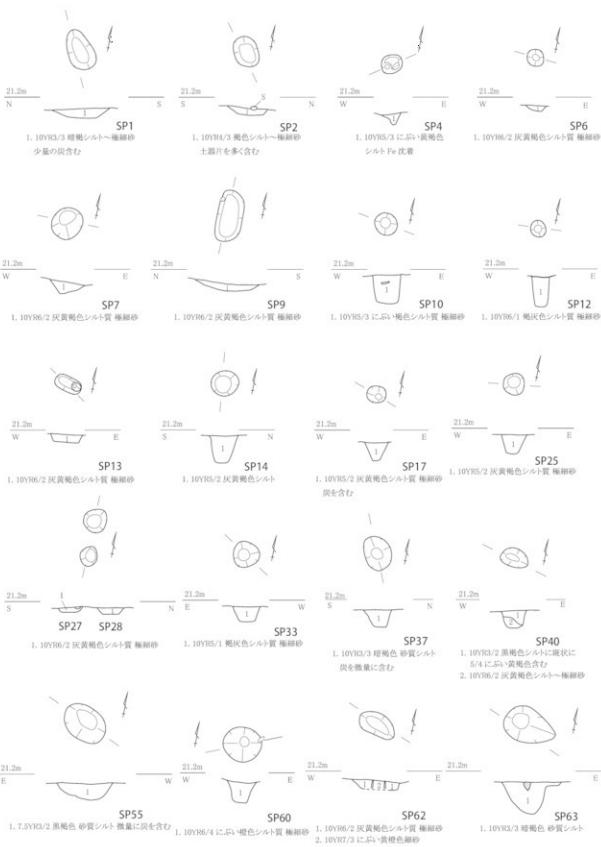


Fig24 土坑・ピット平面図② (縮尺 = 1/40)

SP109・111 調査区南東側でSD 1 の北側より検出したピットである。ともにSX 1 中の埋土により被覆されていた。SP109からは須恵器皿・皿口縁部(142)が出土した。SP111からは弥生土器底部(143)、須恵器皿(144)、須恵器皿・杯底部(145)が出土した。144は体部の屈曲が極めて強い。145は内部に有機物の付着を見るが、内容は不明である。

SP130 調査区南中央でSK 8より検出したピットである。SK 8との関係から二段掘り込みの柱穴の可能性も考えられる。遺物は須恵器皿口縁部(146)が出土した。

SP138 調査区中央東よりSD 3と集石1との間で検出したピットである。須恵器蓋(147)を検出した。

SP146 調査区中央でSD 1 とSD 3 の間より検出したピットである。須恵器皿口縁部(148)を検出した。

SP148 調査区中央でSD 1 によって切られたピットである。土師器の皿口縁部片(149)が出土した。

SP151 調査区中央やや南東より、SX 1 に西側より検出したピットである。土師器皿(150)が出土している。

SP155 調査区中央西側でSH201を切り込んで形成されたピットである。須恵器皿(151)が出土している。151は短く直立する口縁部から強く湾曲して底部へ続く形状を呈する。

SP166 調査区南東でSD 1 とSX 2 を切り込んで形成されたピットである。土師器皿の口縁部(152)と須恵器皿口縁部(153)、須恵器皿底部(154)が出土している。

SP214 遺物が出土していないため時期は不明であるが、方形の掘り方をもつ柱穴である。対応するほかの柱穴等は検出できていない。

SP222 調査区中央西隅でSH201を切り込んで形成されたピットである。弥生土器鉢口縁部(155)、須恵器皿の口縁部(156)が出土している。

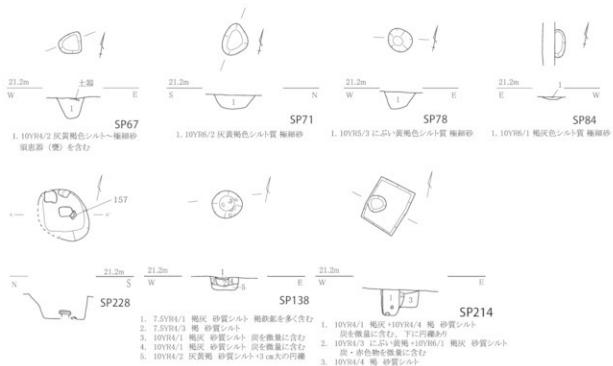


Fig25 土坑・ピット平面図③ (縮尺 = 1/40)

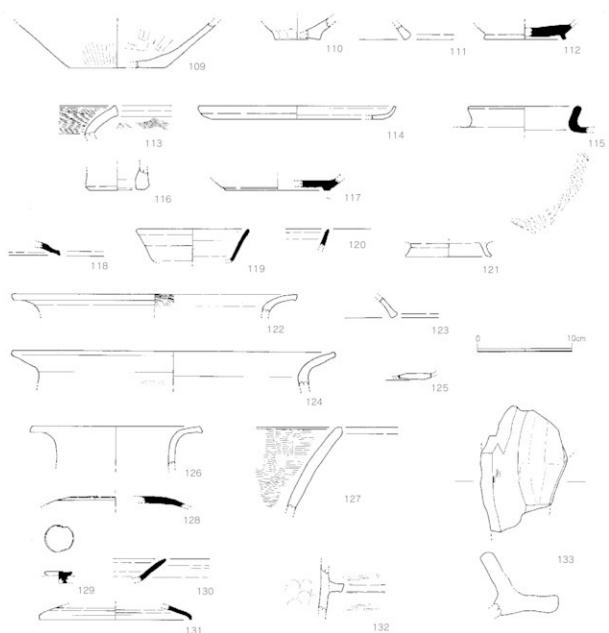


Fig.26 土坑・ビット出土遺物①(縮尺 = 1 / 4)

SP228 調査区中央でSH201の東側、SD 1の西側より検出したピットである。須恵器掬杯の底部(157)が出土している。157は削り出しによる輪高台であり、高台の断面方形で高台高がやや高い。

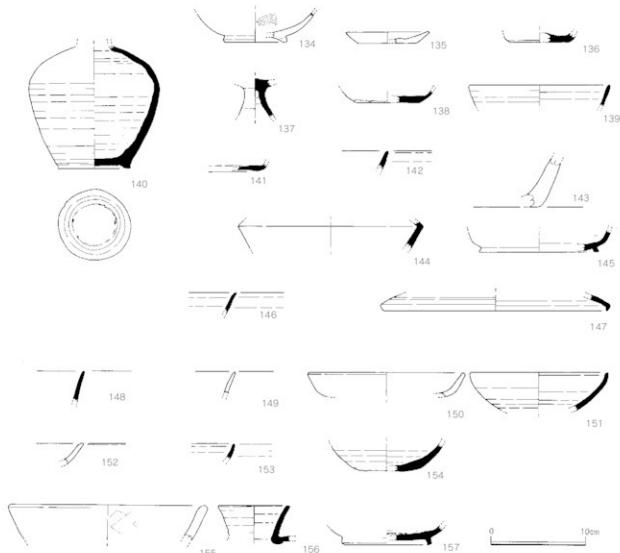


Fig.27 土坑・ビット出土遺物②(縮尺 = 1 / 4)

(4) 不明構

SX 1 (Fig.28) 調査区中央東より検出した不明構であり、SP108～111を被覆するように埋土が堆積していた。不定形で堆積層が薄いため、自然地形の窪地である可能性も考えられる。埋土は褐灰砂質シルトであり、土師器高杯部(158)、須恵器杯口縁部(159)が出土している。

SX 2 (Fig.28) 調査区南東隅で検出した、平面方形を呈す不明構である。SD 1、SP71などによって切られている。東端は調査区外に延びるため、規模などは不明であるが、南北長は約23 mを測る。出土遺物には弥生土器高杯(160～162)と須恵器(163～176)が認められる。162は直立に近い脚部が下方で一度強く屈曲し、外方へ広がる。163～168は蓋である。166は焼けひずみによる湾曲の可能性が否定できないが、口縁部が強く内傾し、器高の高いプロボーションを呈する。169～171は杯の口縁部である。172は蓋・鉢の底部である。器厚が非常に厚く重厚で、平底の資料である。173は掬・杯底部である。焼成は不良で褐色を呈する。高台は貼付けによる輪高台であり、外方へ強く屈曲する。174は蓋の肩部である。175は大型の壺口縁部である。176は蓋の体部である。

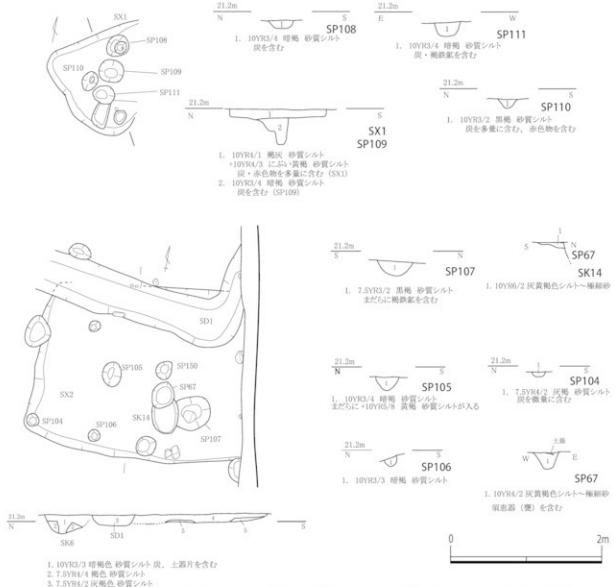
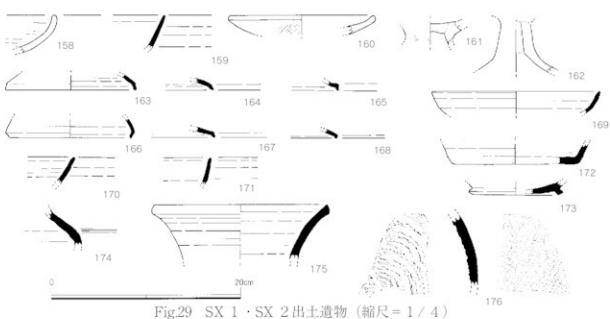


Fig.28 SX 1・SX 2 平・断面図 (縮尺 = 1 / 50)



SX 5 調査区南西隅で検出した遺構で、SH202の埋没後に形成された遺構である。堆積層が非常に薄く平面形が不定形であるため、自然地形の起伏による堆積層の切り替わりを捉えている可能性が高い。調査区南西側は原地形が低くなることがわかつており、SH202の掘削・埋没などによってSX 5の埋没時に起伏が生じていたものであると考えられる。SP 5によって切られていっている。

第3節 近世以降

近世に属する遺構は、調査区北半を中心、第1遺構面を基盤層として検出した。特に北半では集石の遺構を複数検出しており注目できる。

(1) 集石遺構

集石遺構1・集石遺構2 一辺約2mを測る正方形の石開い構造の遺構。集石遺構1の北西隅に、溝状の掘込み中に多量の環を含む遺構である集石遺構2がとりつく形状を呈する。遺構同士が連結しており、一連の機能を有するものであったと考えられるため、ここで併せて報告する。

集石遺構1は北東隅が近代の搅乱によって削平されており、部分的に石開いが途切れる部分があるが、本来は全周していたものと考えられる。石開いは上部の石積みが削平された可能性も考えられるが、現状では2~3石の円窪を面を揃えて積上げて構成されている。石開いの中には周囲からの転落によると考えられる円窪を含んだ灰色シルト層が堆積しており、瓦器(177~179)、土師器土鍋(180~181)、須恵器(182)、陶器(183)が出土したほか、細片であるため図化していないが土師器杯片や須恵器壺頭部、瓦片などが出土した。177~179は瓦質の培塗である。外面には煤の付着が著しい。179には2箇所未貫通の円孔が穿たれ。182は須恵器の高台部である。183は伊万里焼の蓋である。遺物から18世紀後半~19世紀前半の時期が推定できる。

集石遺構2は長辺を東西方向にとる溝状の遺構であり、中に多量の円窪を充填する。東側は集石遺構1と連結し、西側は試掘調査時の掘削と近代の搅乱によって削平されており、本来はもっと西へ広がっていたものと考えられる。最大幅約1.0m、深度0.6mを測り、集石遺構1の底面に比べてかなり深くまで掘削している。埋土である円窪層にはほとんど土砂を含まないことから、遺構掘削後に意図的に円窪を充填したものと考えられる。この円窪層には後述する瓦片が多量に含まれていた。

集石遺構1と集石遺構2は接しており、集石遺構1の北西隅の断割り調査によって、円窪を充填した掘込みによって両者が連結している状況が確認できた。出水等の水に関連する遺構である可能性が考えられる。集石遺構1の南西隅と南東隅にはSP139・SP137がそれぞれ位置しており、集石遺構1の上屋などの上部構造の痕跡の可能性も考えられる。

遺物は土師器(184~191)、須恵器(192~194)、瓦(195~210)が出土している。184~188は土師器土鍋である。184~185は口縁部が内傾し球体にちかいプロボーションを示すもの。187~188は口縁部がやや肥厚し外方へ開くものである。189~191は土師器足釜の脚部である。194は須恵器壺の口縁部である。頸部から口縁部直下までタタキの痕跡が認められる。195~196は巴文丸瓦である。195は珠文をもたないタイプで、磨滅が著しいが、巴の断面は台形状を呈するものと考えられる。焼成は軟質で、色調は橙色を呈する。胎土も粗く、長石、石英、角閃石を多量に含む。196は珠文を持つタイプで、小片のために巴の形状が不明確であるが、細い線で巴を表現する。巴の形状から想定すると通常の瓦当よりも小さいと考えられる。197~200、208、209は丸瓦である。197のみが玉線式丸瓦で、その他は小片のため不

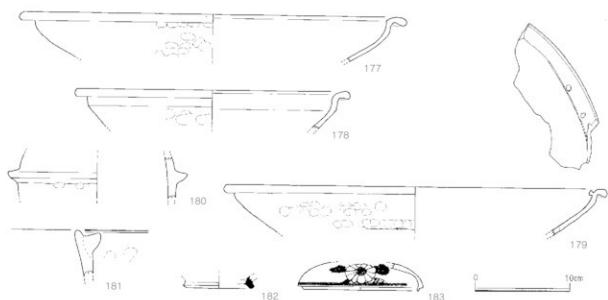
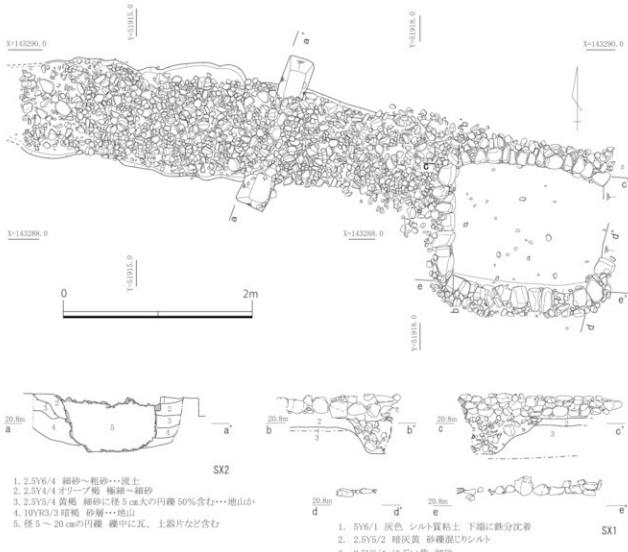


Fig.30 集石造構 1・2 平面図（縮尺 = 1/40）と集石造構 1 出土遺物（縮尺 = 1/4）

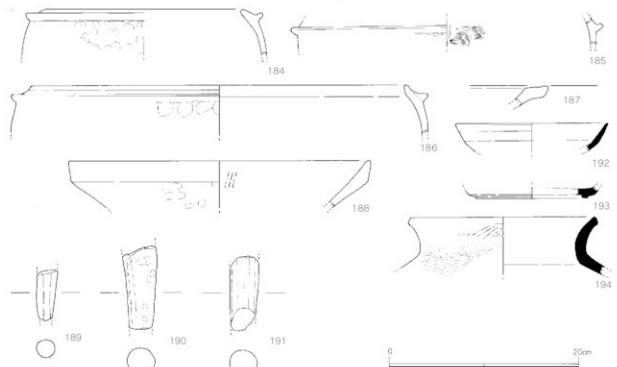


Fig.31 集石造構 2 出土遺物①（縮尺 = 1/4）

明である。197は玉縁部凸面に粗い縄叩きを施している。玉縁部と筒部との段差が小さく、西村遺跡出土の丸瓦に類似しており、平安時代末頃のものと考えられる。198・199は焼し瓦で、198は凹面に糸切り痕と布目が残り、凸面は粗い縄目叩き状の痕跡が認められる。199は凹面に布目が残り、凸面は横方向の板ナデによって仕上げている。198は中世以降のものと考えられる。200は凹面に布袋の綴じ紐と考えられる圧痕が残る。凸面は磨耗が著しく詳細は不明である。208・209は凹面に布目が残り、凸面はナデ調整によって仕上げる。焼されたもの以外はいずれも焼成は軟質で、淡灰色もしくは淡橙色を呈している。胎土もやや粗く、長石、石英を多く含む。

201～207、210は平瓦である。206の凸面には格子目叩きが施され、軟質の焼きで、淡茶褐色を呈する。201、203、204、206、207は、凹面の布目はいずれも細かく、凸面を粗い円弧状の縄目叩きで整形している。残存する広狭端部・側端部はいずれも丁寧な削り調整によって仕上げているが、204・206の側端部には凸型整形台の棟の痕跡が残っており、これらの一組が一枚つくりであることを示している。いずれの平瓦も讃岐国の平安時代後期から末にかけて特徴的な整形技法である。胎土はやや粗く、石英・長石を多量にふくむ。焼成は、203以外は軟質で、淡黃橙色もしくは黃灰色を呈し、203は暗灰褐色を呈する。202、210は凹凸面ともにナデ消すもので、202は焼成が軟質で、胎土も非常に粗い。凸面には糸切り痕らしきものが残っている。210は焼し瓦である。この他にも瓦の小片が出土しているが、多くはこれまで述べた瓦と同じものである。焼し瓦も数点あるが、近世以降と考えられるものはなく、これらの一群は中世段階の所産と考えられる。

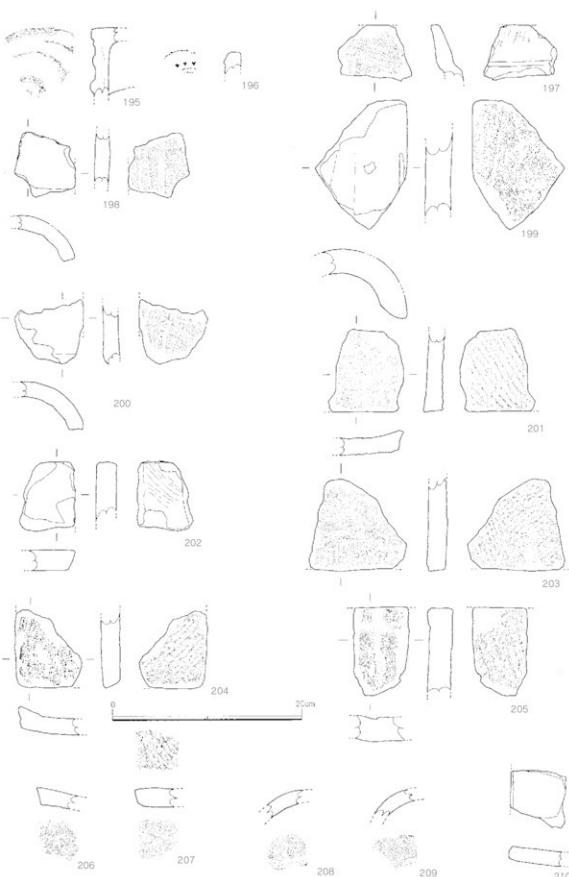


Fig.32 集石遺構2出土遺物②(縮尺=1/4)

集石遺構3 調査区の北端付近、集石遺構2の北側で検出した、集石の遺構である。試掘調査時に西側半分を幅1.5m程度掘削しており、西側に近世以降の擾乱が存在するため、本来の規模と形状は不明であるが、試掘調査時の所見として溝状に調査区外まで伸びていた可能性が高いものと考えられる。出土遺物としては瓦質の焰烙(211・213)、土師器の七厘(212)、土師器足釜の脚部(214)を検出した。211は口縁部が強く屈曲し外反するタイプの資料である。213は直線的に外に向かって開くタイプの資料である。212は底部に2孔の円孔が確認できる。211の口縁部形状などをみても集石遺構1・2出土例と類似しており、同時期の遺構であると考えられる。

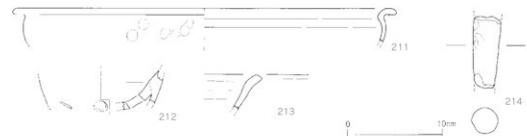


Fig.33 集石遺構3出土遺物(縮尺=1/4)

SK34 調査区北端で検出した土坑であり、長辺20m、短辺1.3mを測る。いずれも固化していないが、観や瓦、野窓片など多様な遺物がガラス瓶片やビニール等とともに検出された。近代以降の遺構である。

Tab. 5 拝師庵寺 出土遺物観察表

第V章まとめ

第1節 古代の区画溝について

古代の溝SD 1は方形を指向した溝であり、直角に近く屈曲することから、何らかの区画を意図した溝であると考えられる。出土遺物と遺構の切りあいから、8世紀前半に埋没した遺構である可能性が高い。遺構の主軸方向をみると、南北方向の溝はほぼ座標方位と一致し、東西方向の溝はそれに直交する状況であることがわかる。高松平野の条里地割はN 9~11° E傾くことが知られているが、SD 1は条里的方向と一致しない。当遺跡の北側に位置する空港跡地遺跡では条里地割に沿った遺構配置が検出されているが、SD 1の開削に当たっては別の規制因子が存在した可能性が考えられる。

SD 1で区画された範囲の中には土坑・ピットを中心とした遺構が多数存在する。しかし、調査中に平面プランを復元できた遺構は無く、区画内の構造については不明であると言わざるを得ない状況である。

第2節 出土した瓦と寺院について

これまで拜師庵寺の存在を示す資料は、安藤文良氏によって報告されている元押師神社出土の八葉草弁蓮華文軒丸瓦、七葉複弁蓮華文軒丸瓦（安藤1967）と香川県教育委員会によって調査された空港跡地遺跡で出土している瓦片。高松市教育委員会による讃岐国弘福寺領調査の際に空港跡地遺跡の南側で採集された瓦の小片（高松市教委1992・1999）のみであり、拜師庵寺想定地の発掘調査によって出土した資料は、本資料が初めてである。しかし、出土瓦は調査区北側の集石遺構からまとめて出土しているが、集石遺構自体は近世以降の所産であり、拜師庵寺の存在を直接的に示すものではなく、資料的制約があることは否めない。

そのような中で、今回出土した資料は小片ではあるが、拜師庵寺の歴史を考える上では非常に重要な資料となるものと思われる。今回の発掘調査で出土した資料の多くは平安時代末頃に比定できるものである。この点とこれまで知られている七葉複弁蓮華文軒丸瓦が讃岐国分寺SKM07と同文であり、10世紀後半に比定できることと合わせて考えると、創建は不明であるが、10世紀後半段階に堂宇が存在していたことには間違いなく、平安時代末頃には一度、堂宇の修復等が行われた可能性が高いことが分かる。

一方、本調査地は包蔵地のほぼ中央に位置するものの、その瓦の出土量は少なく、寺院に関する遺構と考えられるものが確認できなかったことから、調査地が中心施設から離れている可能性と寺院自体が小規模な伽藍であった、もしくはお堂程度の規模であった可能性が考えられる。いずれにしても、現在の包蔵地の範囲と実際の拜師庵寺が存在した範囲については、試掘や立会調査等と通じて今後検討していく必要がある。（渡邊）

〔参考文献〕

安藤文良1967「讃岐古瓦図鑑」「文化財協会報特別号8」香川県教育委員会

藤井利三ほか編1992「讃岐国弘福寺領の調査」弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書 高松市教育委員会
山本次之ほか編1999「讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ」第2次弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書 高松市教育委員会

調査番号	遺構名	種類	形態	測量(cm)		文様・調査		色調	助材	備考
				口径	器高	底径	外面			
1	武龍崎	弥生土器	鉢	23.6	(2.4)	-	ナゲ	ナゲ	にぶい・黒	2mm以下の石 SVH7/4
2	武龍崎	須恵器	杯	-	(4.0)	-	回転ナゲ	回転ナゲ	にぶい・黒	2mm以下の石 長・石不含む SKM6/0
3	工事立	弥生土器	鍵	16.0	(7.1)	-	ナラハ・ナゲ	ナラハ	にぶい・黒	2mm以下の石 色
4	第2事立	弥生土器	小皿	7.0	1.4	5.3	ナゲ、底部底切り	ナゲ	にぶい・黒	2.5mm以下の石 色
5	山田	不明	土器	14.0	(4.7)	-	ミナハ・ナナメ	ミナハ	にぶい・黒	2.5mm以下の石 灰白
6	山田	不明	土器	-	(6.5)	15.8	ナゲ	ナラハナゲ	にぶい・黒	2.5mm以下の石 明るい緑
7	山田	不明	土器	13.2	(3.0)	-	ナゲ	ナゲ	灰白	2mm以下の石 灰白
8	山田	須恵器	鍵	-	(1.7)	9.0	ナゲ	ナゲ	灰白	2mm以下の石 灰白
9	山田	不明	土器	-	(3.0)	-	回転ナゲ	回転ナゲ	明るい緑	2mm以下の石 灰白
10	山田	不明	土器	-	(2.5)	-	ナゲ	ナゲ	にぶい・黒	0.5mm以下の石 灰白
11	第2事立	須恵器	小皿	19.4	(2.0)	-	回転3条	ヘラナゲ	にぶい・黒	2.5mm以下の石 色
12	第2事立	弥生土器	鉢・盆	-	(3.2)	8.6	ナラハナゲ	ナラハナゲ	灰白	2mm以下の石 灰白
13	SH2020	弥生土器	広口鉢	16.2	(1.0)	-	雨崩ナゲ、竹管	雨崩ナゲ	灰白	2mm以下の石 灰白
14	SH2020	弥生土器	鍵	-	(3.7)	5.8	ナラハナゲ、ナゲ	ナラハナゲ	明るい緑	2mm以下の石 灰白
15	SH2020	弥生土器	鍵	-	(2.5)	4.2	ナラハナゲ	ナラハナゲ	灰白	2mm以下の石 灰白
16	SH2020	弥生土器	鍵	11.0	(5.0)	1.8	マツナ・指崩正	ナゲ	明るい緑	2mm以下の石 灰白
17	SH2020	弥生土器	高杯	-	(1.6)	-	ナゲ	ナラハナゲ	明るい緑	2mm以下の石 灰白
18	SH2020	弥生土器	高杯	-	(2.7)	18.4	ナゲ	ナラハナゲ	明るい緑	2mm以下の石 灰白
19	SH2020	弥生土器	鍵	44.4	(4.8)	-	ナゲ、マツナ	ナゲ	にぶい・黒	2mm以下の石 灰白
20	SX7	弥生土器	広口鉢	16.6	(1.0)	-	ナゲ	ナゲ	1mm以下	2mm以下の石 灰白
21	SX7	弥生土器	鍵	-	(5.1)	-	ナゲ	ナゲ	にぶい・黒	1mm以下
22	SX7	弥生土器	口鉢	-	(4.6)	-	ナゲ、口縁部凹継1 条	ナゲ	にぶい・黒	1mm以下
23	SX7	弥生土器	口鉢	-	(4.0)	-	ミナハ	ミナハ	にぶい・黒	2mm以下の石 灰白
24	SK32	弥生土器	鍵	34.6	(5.0)	-	ナゲ	ナゲ	にぶい・黒	1mm以下の石 色
25	SK32	弥生土器	鍵	42.2	(5.0)	-	ナゲ	ナゲ	黄褐色	1mm以下の石 色
26	SK32	弥生土器	鍵	44.8	(4.8)	-	ナゲ、ナラハナゲ	ナゲ	にぶい・黒	1mm以下の石 色
27	SK32	弥生土器	鍵	-	(5.8)	-	ヘラナゲ	ヘラナゲ	にぶい・黒	2mm以下の石 色
28	SK33	弥生土器	鍵	16.6	(2.1)	-	ナゲ	ナゲ	明るい緑	2mm以下の石 色
29	SK33	弥生土器	広口鉢	15.0	(1.0)	-	ナゲ	ナゲ	明るい緑	2mm以下の石 色
30	SX8	弥生土器	広口鉢	20.0	(1.7)	-	ナゲ	ナゲ	灰白	2mm以下の石 色
31	SX8	弥生土器	鍵	18.0	(4.7)	-	ミナハ・ナナメ	ミナハ	灰白	4mm以下の長 石・石不含む

*法量の()は、残存部を示す。

文書番号	遺構名	埋蔵層	埋深(cm)	文様・範囲		備考					
				口縁	裏面		内面	外側	内面	船上	
52	SNS8	男生・鉢	- (6.5)	-	タテナガ	眉顎正直	櫛SBTR/6	7.5YR1/8	1~3mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
53	SNS8	男生・鉢	33.6 (1.9)	-	+ナガ	ナガ	に似る・横 に似る・縦	7.5YR1/8	3mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
54	SNS8	男生・土器	- (3.0)	-	+ナガ	ナガ	に似る・横 に似る・縦	7.5YR1/6	0.5mm以下以下の 石英・長石・含 泥質物等		
55	SNS8	男生・鉢	- (10)	-	+ナガ	ナガ	に似る・横 に似る・縦	7.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
56	SNS8	男生・土器	- (5.0)	-	+ナガ	ナガ	に似る・横 に似る・縦	7.5YR1/7	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
57	SNS8	男生・高杯	- (4.6)	-	マツナ	マツナ	櫛SBTR/6	7.5YR1/6	2mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
58	SNS8	男生・土器	34.8 (4.6)	-	+ナガ	ナガ	に似る・横 に似る・縦	7.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
59	SNS8	男生・鉢	38.8 (5.0)	-	+ナガ	ナガ	に似る・横 に似る・縦	7.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
60	SU291	土器・杯	19.0 (4.1)	-	ミナナ	コロナカキ?	櫛SBTR/6	7.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等	埋文なし調査は全体に不 明瞭	
61	SN2	唐物・盃	- (4.6)	-	+ナガ	ナガ	に似る・横 に似る・縦	10YR1/4	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
62	SN2	唐物・杯	- (1.6)	-	回転ナナ	回転ナナ	櫛SBTR/6	7.5YR1/7	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
63	SN2	唐物・杯	14.7 (4.1)	10.4	回転ナナ	回転ナナ	UR6/6	7.5YR1/7	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
64	SH282	男生・壺	15.0 (2.0)	-	+ナガ	ナガ	櫛	7.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等	付属陶片	
65	SH282	男生・土器	23.7 (2.0)	-	ミナナ	ミナナ	明赤褐色	7.5YR1/4	2mm以下の石 英・長石・含 泥質物等 母貝少含む	高級付着	
66	SH282	男生・土器	16.0 (8.0)	-	ミナナ?・ハナ、口縁 横にはくちらのミナナ?	ミナナ?・指ナナ、 指ナナ?・口縁 横にはくちらのミナナ? は指ナナ?のもの	南	7.5YR1/3	7.5YR1/2	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等 母貝少含む	
67	SH282	男生・壺	19.2 (1.2)	-	+ナガ	ナガ	櫛SBTR/6	7.5YR1/7	1~2mm以下の 石英・長石・含 泥質物等		
68	SH282	男生・土器	- (5.7)	4.2	マツナ	マツナ	櫛SBTR/6	7.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
69	SH282	男生・高杯	- (8.2)	-	リバーナ(波)、口縁 5mm、焼成前縫合?	リバーナ(波) 波状伏(くわう) 波状伏(くわう) 上)	櫛SBTR/6	7.5YR1/6	金葉面を含 む(石英、長 石、金葉)		
70	SH282	男生・唐物壺	- (1.8)	7.0	ヘラカキ	ヘラカキ(リバーナ 波)	に似る・横 に似る・縦	7.5YR1/4	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
71	SH282	男生・土器・壺	17.4 (1.6)	-	ミナナ?	ミナナ?	櫛	7.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
72	SH282	男生・土器	21.2 (1.3)	-	ミナナ?・竹管文	ミナナ?	櫛	2.5YR1/6	2.5YR1/6	赤色含む	
73	SH282	男生・土器	16.0 (2.3)	-	ミナナ?	ミナナ?	明赤褐色	SYB3/3	2.5YR1/6	赤色含む	
74	SH282	男生・土器	15.2 (1.0)	-	ミナナ?	ミナナ?	櫛	2.5YR1/6	2.5YR1/6	赤色含む	
75	SH282	男生・土器	- (3.8)	-	ミナナ?	ミナナ?	櫛	2.5YR1/6	2.5YR1/6	赤色含む	
76	SH282	男生・土器	- (1.7)	5.8	板状ナナ?もしもは押 出	板状ナナ?もしもは押 出	櫛	2.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
77	SP530	男生・高杯	15.8 (2.7)	-	ミナナ?・ハナ	ミナナ?・指ナナ 指ナナ?	櫛SBTR/6	7.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
78	SP530	男生・土器	- (10.6)	-	タテナガ?・タビナガ?	タビナガ?	明赤褐色	2.5YR1/6	2.5YR1/6	赤色含む	
79	SP530	男生・土器	- (2.9)	4.8	ガブナナ?	ガブナナ?	櫛	7.5YR1/6	7.5YR1/6	赤色含む	
80	SP530	男生・土器	- (17.6)	(7.3)	-	ミナナ?	櫛	7.5YR1/6	7.5YR1/6	赤色含む	
81	SK253	男生・要	- (4.2)	5.1	-	+ナガ・タタナギナ	ナナ?・ヘラカキ?	7.5YR1/6	0.5mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
82	SK255	男生・土器	- (3.8)	-	+ナガ?・竹管文	ナナ?	櫛	2.5YR1/6	2.5YR1/6	赤色含む	
83	SK255	男生・土器	- (2.8)	5.2	タタナギナ?・ヘラカキ?	ナナ?	櫛	7.5YR1/6	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
84	SK255	男生・土器	- (1.5)	-	-	ナナ?	櫛	2.5YR1/6	2.5YR1/6	赤色含む	
85	SK255	男生・土器	- (15.0)	1.0	-	ミナナ?	櫛	7.5YR1/6	7.5YR1/6	赤色含む	
86	SK255	男生・土器	- (1.6)	-	-	ナナ?	櫛	7.5YR1/6	7.5YR1/6	赤色含む	
87	SK255	男生・土器	- (4.4)	-	-	ナナ?	櫛	7.5YR1/7	7.5YR1/7	赤色含む	
88	SK255	男生・土器	- (4.7)	3.8	+ナナ?	ナナ?	ナナ?	10YR1/2	2mm以下の石 英・長石・含 泥質物等		
89	SK255	男生・土器	- (5.2)	6.0	タテ板カキ?	タテ板カキ?	ナナ?	10YR1/3	1mm以下の石 英・長石・含 泥質物等	複数個あり	

文書 号	道場名	種類	番号	基準	外観	文様・調整		色調	被付 合意書等	備考	
						内面	外面				
71 SK17	秀生 土蔵	裏	16.0 (14.1)	-	ヨコナガ、タテナガ、タテナガ ヨコナガ、四脚	ヨコナガ、ヘタナガ のち指捺印	明赤褐色 2.5YR5/6	SYR5/6	3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
72 SK17	秀生 土蔵	裏	14.6 (9.1)	-	ナゲ	指捺印のナ ゲ、ヘタナガ	に白い斑 10YR9/2	明赤褐色 SYR5/6	3mm以下の石 英・長石・角 閃石合意書等	-1mm以下の 石英・長石・角 閃石合意書等	
73 SK17	秀生 土蔵	裏	(5.0)	-	タテナガ	ナゲ	に白い斑 10YR9/2	明赤褐色 2.0YR8/1	3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	接合版あり	
74 SK17	秀生 土蔵	裏	(7.1)	2.5	ヨコナガ、マツナガ、板ナガ	指捺印、ナゲ	樹脂8/6	7.5YR8/3	に白い斑 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
75 SK30	秀生 土蔵	広口黒	29.0 (3.0)	-	ナゲ	ヘタナガ	に白い斑 7.5YR8/4	7.5YR8/3	に白い斑 3mm以下の 石英・長石・角 閃石合意書等		
76 SGX31	秀生 土蔵	裏・黒	(2.7)	5.5	タテナガ、ナゲ	ナゲ	樹脂8/6	7.5YR8/6	3mm以下の石 英・長石・角 閃石合意書等		
77 SK31(1)	秀生 土蔵	高杯	(1.7)	-	ヨコナゲ	ヨコナゲ	白灰	7.5YR8/2	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
78 SD5	秀生 土蔵	高杯	(3.0)	-	ナゲ	ナゲ	樹脂8/6	7.5YR8/6	樹脂8/6	3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	
79 SD5	秀生 土蔵	高杯	24.6 (3.7)	-	ナゲ、ヘタナガ	ナゲ	樹脂8/6	7.5YR8/6	樹脂8/6	3mm以下の石 英・長石・銀 盤合意書等	
80 SP165	秀生 土蔵	裏	18.6 (1.4)	-	ナゲ	ナゲ	に白い斑 2.5YR8/6	7.5YR8/6	3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
81 SP3	秀生 土蔵	裏・黒	(5.5)	4.2	タキナガのナゲ	ナゲ	樹脂	7.5YR8/8	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
82 SP54	高色	緑	13.6 (4.3)	6.8	回転ナゲ、ヘタ切羽	マツナ	に白い斑 7.5YR8/1	7.5YR8/2	に白い斑 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	内面黒化。接合版あり	
83 SD1	秀生 土蔵	裏	(13.8)	(6.5)	-	ヨコナゲ、タテナガ	ヨコナゲ、 タテナゲ、ナ ゲ	7.5YR8/3	7.5YR8/3	に白い斑 3mm以下の 石英・長石・角 閃石合意書等	
84 SD1	秀生 土蔵	裏	(8.6)	12.2	タテナガ、ヘタナ ヘタナガ	ヘタナガ	樹脂8/6	10YR5/1	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・角 閃石合意書等		
85 SD1	秀生 土蔵	不明	(1.7)	3.2	指捺印	マツナ	樹脂	10YR8/1	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
86 SD1	土耕	高杯	13.2 (3.5)	-	マツナ、ナゲ	マツナ、ナゲ	樹脂	7.5YR8/6	7.5YR8/4	に白い斑 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	内面に鉛錆付着
87 SD1	土耕	不明	(0.75)	-	不明	タケナ	樹脂8/6	7.5YR8/4	白灰8/6	内面の黒色部分は重ね 墨の跡合意書等	
88 SD1	頃患	裏	14.0 (1.4)	-	ナゲ	ナゲ	白灰8/6	8/6	10mm以下の砂 粒合意書等		
89 SD1	杯	杯	16.6 (3.8)	13.6	回転ナゲ	回転ナゲ	白灰8/6	7.5YR8/2	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
90 SD1	透磨	杯	16.0 (1.5)	10.9	回転ナゲ、回転ナ ゲ	回転ナゲ	白灰8/6	7.5YR8/6	3mm以下の砂 粒合意書等	内面に自然釉付着	
91 SD1	透磨	杯	12.4 (2.5)	4.2	回転ナゲ	回転ナゲ	樹脂8/6	7.5YR8/1	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	0.5mm以上の 内面に自然釉付着	
92 SD1	透磨	杯	12.4 (3.9)	9.8	回転ナゲ	回転ナゲ	樹脂8/6	7.5YR8/1	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
93 SD1	透磨	梅	-	(1.6)	7.4	ナゲ	白灰8/6	7.5YR8/6	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
94 SD1	秀生 土蔵	裏	(2.4)	-	接合版ナ、タキナ ゲ	ナゲ、タキナ ゲ	白灰	2.0YR7/1	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
95 SD1	透磨	裏	(11.8)	-	ヨコナゲのナゲ	ナゲ	白灰8/6	7.5YR8/7	砂粒などに 含む		
96 SD3	秀生 土蔵	広口黒	15.2 (1.0)	-	ナゲ	ナゲ	明赤褐色 SYR5/6	7.5YR8/6	3mm以下の石 英・長石・角 閃石合意書等	1mm以下の石 英・長石・角 閃石合意書等	
97 SD3	土耕	広口黒	20.0 (1.1)	-	タケナ・竹管文	タケナ	樹脂8/6	10YR7/1	明赤褐色 2.5YR8/6	3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	
98 SD3	秀生 土蔵	裏	20.0 (3.4)	-	ヨコナゲ、ナメハナ	ヨコナゲ、 ナメハナ	白灰8/6	7.5YR8/6	3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
99 SD3	秀生 土蔵	裏	14.0 (4.3)	-	マツナ	ナゲ	に白い斑 7.5YR8/4	7.5YR8/5	に白い斑 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
00 SD3	秀生 土蔵	直口瓶	-	(7.0)	-	ナゲ	指捺印	明赤褐色 SYR5/6	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	1mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	
01 SD3	秀生 土蔵	裏	39.2 (9.2)	-	マツナ	マツナ	白灰	10YR8/2	明赤褐色 10YR8/3	1mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	
02 SD3	秀生 土蔵	曲	-	(2.2)	6.2	ナゲ	白灰	10YR8/1	明赤褐色 2.5YR8/1	1mm以下の石 英・長石・白 金合意書等	
03 SD3	透磨	抹茶器	7.8 (9.7)	4.1	平行手打ナ	指捺印	反白8/7/1	7.5YR8/4	明赤褐色 7.5YR8/4	2mm以下の砂 粒渺少合意書等	
04 SD3	土耕	把手付 鉢	-	(4.5)	-	ナゲ	指捺印	に白い斑 10YR8/3	明赤褐色 10YR8/3	2mm以下の砂 粒渺少合意書等	内面、内面、断面に鉛錆付着
05 SD3	透磨	杯	16.6 (3.95)	-	回転ナゲ	回転ナゲ	白灰8/6	2.5YR7/1	明赤褐色 3mm以下の石 英・長石・白 金合意書等		
06 SD3	透磨	鉢・盆	-	(4.3)	-	回転ナゲ	回転ナゲ	10YR8/1	10YR9/3	3mm以下の石 英・長石・銀 盤合意書等	